

アインクラッドからの転生者

アルシャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私はね、キリト君。まだ信じているのだよ……どこか別の世界には、本当にあの城が存在するのだと……」

ならば、実在させよう。

この物語は、アインクラッドから転生してきた主人公が、無知なために様々な勘違いをしながらソードアート・オンラインをやる話。

目次

第1話	アインクラッドからの転生者	1
第2話	詩乃	8
第3話	アインクラッドへ	15
第4話	デスゲーム	24
第5話	決意	34
第6話	過去	42
第7話	ホルンカ	53
第8話	多対1	60
第9話	コペル	68
第10話	キリト	74
第11話	キリリト	82
別視点	キリト 1	89
第12話	V Sキリト	97
第13話	空腹	103
第14話	コル	112

第1話 アイんクラッドからの転生者

かすかな風の音と共に、コツ、コツと音が聞こえてきた。

振り返ると、1人の男が、長剣と十字盾を構えて、この尖塔の屋上にやってきていた。

男は闘志を燃やしており、ただならぬ雰囲気だ。

「……………ここは、この城の中で一番高い場所、つまり、一番いい景色を見れる場所だ、そう思わないか？」

「……………」

全天燃えるような夕焼けだった。

どこまでも続くような夕焼け空。鮮やかな朱色から血のような赤、深い紫に至るグラデーションを見せて無限の空が果てし無く続いている。

「景色を眺めにきた……………と、言うわけでは無いのだろうか？」

「勿論だ」

「そうか……………考え直す気は」

「無い」

「……………俺もだ、だから、この鍵は渡さない」

「渡してもらおう、この先に進むために、その鍵を、例えば、お前を殺してでも」

「渡さない、この世界を守るために、この鍵を、例えば、お前を殺してでも」

男は腰に下げていた2本の剣を抜き、両手に構えた。

「ここを、クリフの墓場とする、この先はない」

「いや、私は先を進んで行く、だから今日が、お前と、この城の最後だ」

……………

「ハアアアア!!!」

「うおおおお!!!」

ガキン!

剣と盾がぶつかり合い、火花が散り、二人の顔を一瞬明るく照らす。金属がぶつかり合うその衝撃音が、戦闘開始の合図だったとでもい

うように、一気に加速した二人の剣戟が周囲の空間を圧した。
戦いの火蓋は、切って落とされた。

チリリリリン！ チリリリリン！

「っ、もう朝か」

俺は目覚まし時計によって、夢の世界から目覚めさせられた。
随分と懐かしい夢を見た。

俺がこの日本で生まれる前の、前世の夢を。

突然だが、俺には前世の記憶がある。

……待て、俺は頭の痛いやつでは無い、と、思う。

いや、前世の記憶がある時点で頭の痛いやつなのかもしれないが。
何故前世の記憶があるのかは知らん、あるんだから仕方ない。

前世では、戦いの日々だった。

戦って、戦って、先を知るために登り続けた。

何度も傷つき、死にかけて、数々の敵を、人を殺して、4人で駆け
上がって行った。

先を知るために、この先に何があるのかを知るために。

そして最期には……

そんな激動で、毎日が死と隣り合わせの血なまぐさい人生を送って
来た俺が、今では平和な日本の学生だ。

俺は今だに、この平和にあまり馴染めていない。

まだ身近に知らない生物の気配を感じると、つい腰に手が伸びてし
まうくらいだ。

別に俺は戦闘狂ではない、と思う。

勿論、クリフやカズヤに比べれば、脳筋ではあったが。

前世では毎日が闘争の日々だった。

だから平和に馴染めないのも仕方ないのかもしれない。

しかし、もう十数年間生活して未だに馴染めないのは、やはり
前世に心残りがあるからなのかもしれない。

いや、今だに夢に見るくらいだ、間違はなく心残りのせいだろう。だが、前世は前世、今生には一切の関わりがないことだ。そう、自分に何度言い聞かせても、いつまでも忘れることができなかった。

平和だ、本当にこの国は平和だ、平和が過ぎる。

だって、まだこの十数年あまりの人生で、たったの二度しか命の危機が無かつたくらいなのだから。

まあ、その内1回は5歳の頃だったから、結局途中で力尽きたんだが。

だからあれは俺の力ではなく運良く助かったただけだ。

目覚まし時計は、6時半を指している。

そして、ゆっくりと針が進んで行く。

だが、俺の時は、きつと前世で止まったままだ。

「おはよう、詩乃」

「おはよ、お兄ちゃん」

俺は妹が用意してくれた朝飯を食いながら、ついていたテレビを見た。

テレビにはナーヴギアと言うものが写っている。

ナーヴギアとは、2022年5月に発売された、頭から顔までをすっぽりと覆う、流線型のヘッドギアで、これを被ると、ゲームというものが遊べるらしい。

しかも、普通のゲームというものではなく、ゲームという世界の中に行けるらしい。

フルダイブだとかなんとか。

と、テレビが話している。

正直、何を言っているのか分からなかった。

確かゲームと言うものは、ボタンを押すと絵が動く不思議な玩具だったと思うのだが、あのヘルメットを被ってどうやって遊ぶのだから。

うか？

分からない。

それからテレビは、信号素子がなんとか、電気信号がなんちゃら、脳がどうのこうのと、訳のわからないことを話していた。

多分、クリフやカズヤならわかるのだろうな。

あいつらは頭がいいから。

もしかしたら、キズナもわかるかもしれない。

分からないのは俺だけか。

いや、分かるうとしないだけか？

正直に言うと、あまり興味がない。

別に、これに限ったことではないが、俺は今生では物事に対する興味が薄い。

それは、今だに前世を忘れられないからだと思う。

いくらこの世界に、日本に転生したと言っても、俺の心は、魂は今だに、前世のインクラッドに囚われ続けているのだろう。

テレビに興味を失った俺は、朝食を食べることに集中した。

「……美味しい」

「そう」

「なあなあ、ソードアートオンライン、みたか!? ヤツベっしょ! まじでー!」

「マジヤベーよな!? パナくない!」

学校で、席について窓の外をボーッと眺めていると、クラスメイトたちの声が聞こえてきた。

「俺あのPV見てマジやりたくなかったわー」

「じゃあテストの応募したん?」

「したにきまつてんだろモチノロン! だけど1000人とか少なすぎだわマジで、俺たち日本人何人いると思ったんだよ、72億だぞ!

72億人! その中の選ばれし1000人とか、マジ無理無理」

「だよなー、えっと、72億分の千だから、72万分の1くらい？
うっは、宝くじー！」

「あー、1億円ほしーわー、どっちがいい？ 宝くじ1億円と、ソード
アートオンラインのβテスターー！」

「「「1億円!!」「「「「」」」」」

「お金には勝てなかったよ……」

「因みに、ナーヴギアの総販売台数が約20万なので、最高でも20万
分の千、つまり倍率200倍程度であり、72万分の1ではない、何
より72億の千分の一は720万、そして、日本人は約1億2600
万人程度であり、世界人口が約」

「どころでさ、モチノロンって、言い換えるとヤバない？ モロの」

ガラガラガラ

「席つけよー」

教室に先生がやってきた。

「「「はーい」「「「」」」」

今日も、代わり映えのしない平穏な1日が終わった。

ずっと、この平和な日々が続くのだろうか？

続くんだろうな。

俺は漠然と、そう考えていた。

それから、数週間の時が過ぎ去った。

今、世間では、ソードアートオンラインというものが流行っている
らしい。

クラスの人間も、街の中の人間も、テレビの人間もみんなソード
アートオンラインと、ナーヴギアの話ばかりをしている。

あまり詳しくは知らないが、魔法という不思議なものがない世界

で、武器一本を頼りに駆け抜ける物らしい。

魔法がある世界というのもよく分からないが。

なんとなく、面白そうではある。

前世では、ずっと戦っていたからな。

もしかしたら、楽しいかもしれない。

だから、少し興味を抱いた。

だが、そのゲームをやるには、宝くじを当てないといけないらしい。

そして、宝くじとは、72万分の一の確率で当たるらしい。

確かクラスメイトがそう話していたのを覚えている。

ちやうど通学路の近くに宝くじ屋があったので、学校の帰りに寄ってみた。

「いらっしやい、一口200円だよ！」

200円、72万分の一で当たるものが、1回200円、つまり、1億4400万円分くらい宝くじを買わなければソードアートオンラインは出来ないのか。

俺は鞆の中の財布を開いた。

財布の中には2154円しかなかった。

「……無理か」

ソードアートオンライン、面白そうではあるが、諦めるか。

俺は宝くじ屋を後にした。

そうして家に帰っている途中、街中で一つのポスターが目に入った。

そのポスターには、空に浮いた鋼鉄の城が書かれていた。

俺は何故か、それから目が離せなかった。

「これ、は」

心臓の鼓動が早くなり、街中の雑踏の音が遠ざかっていった。

「ま、さか」

俺はこれを見たことはない、はずだ。

なのに、見たことがある気がする。

俺はこれを知らない、はずだ。

なのに、知っている気がする。

……ま、さか、まさか!?
あり得ない! なぜ、何故だ!?
何で、何でここに、ここにある?
似ているだけ? 偶々?

だが、よく思い返してみれば、前世の幼い頃の朧げな記憶の中に、4人で展望テラスから見上げた景色と、このポスターの絵が重なるところがあった。

これは、この場所は。

そのポスターの隅には、こう書かれていた。
ソードアートオンライン、浮遊城アインクラッド、と。

俺はしばらくその場に立ち尽くしながら、何故、何故、何故、と考え続けていた。

だが、どれだけ考えても分からなかった。

ならば、やるしかない、やってみるしかない。

ソードアートオンラインを。

俺は急いできた道に戻った。そして、とある店に入った。

「すみません! 宝くじをください!」

第2話 詩乃

俺は宝くじを買って家に帰った。

「ただいま！ 詩乃！ 詩乃！ 居るか！」

俺は帰ってすぐに詩乃を呼んだ。

「なに？ どうしたのいきなり、お兄ちゃん何かあった？」

詩乃が驚いている。声が大きかったのかもしれない。

「ああ、すまない、詩乃、これ」

俺は買ってきた宝くじを詩乃に渡した。

「え？ 宝くじ？ お兄ちゃんが買ったの？」

「ああ、どうしてもやりたくなっただんだ！」

ソードアートオンラインを！

「そ、そう？ まあ、お兄ちゃんのお金だし、いいんじゃないの？」

「これからどうすればいいんだ？」

どうすればソードアートオンラインが出来るのだろうか？

もちろん、初めから72万分の1が当たるとは思わない。

だが、宝くじを買ってから、なにをすればいいかが分からなかった。

だから、本をよく読んでいて色々詳しい詩乃に聞いて見た。

「えっと、多分ネットとかで当選番号が発表されるんじゃない？ 日

付は、9月16日ね」

詩乃は宝くじを見ながらそう答えた。

「そんなに先なのか？」

「そうみたいよ」

「そうか」

「……お兄ちゃん、何かあったの？ なんだかいつもと雰囲気が違う

みたいだけど」

「ああ」

雰囲気が違う、か。

確かにそうだな。

今まで俺はほとんど惰性で過ごしてきた。

自分の意思で動いたことなんて、体を鍛えること以外では、二度の

命の危機以外ではほとんどなかった。

やらなければならぬことだけ、俺は行ってきた。

それは、俺が未だに、前世を引きずり続けているからだ。

そんな生き方は生きていけるとは言わない、ただ死んでいないだけだ。

だから、前世となんらかの繋がりがあってもかもしれない、ソードアートオンラインというものをやれば、前世の未練を晴らすことができるかもしれない。

もしくは、踏ん切りがつくかもしれない。

そうすれば、俺は今生を十全に生きられるようになる、そんな予感がする。

そのため、俺はなんとしてでも、ソードアートオンラインをやらなければならぬ。

もしかしたら、俺が生まれ変わったのは、この世界のインクラッドと関わりがあるのかもしれない。

前世との繋がりを見つけることができ、目の前に道が広がった気分だ。

だから雰囲気違って見えるのだろう。

「俺はようやく、見つけたんだ、きつと、俺はこれを求め続けていたんだ、もしかしたら、俺はこれをやるために生まれてきたのかもしれない」

「そ、そうなの？」

「ああ、ずっと灰色だった人生に、ようやく色がついた気分だ、俺は、これに出会うために生まれてきたんだ、間違いない」

そう、ソードアートオンラインに、出会うために。

「そんなに、宝くじをやりたかったんだ……」

結果は、ハズレだった。ソードアートオンラインは、当たらなかった。

だが何故か、2000円が当たったらしい。

抽選結果というものを見ても俺には何が何だかわからなかった。だから詩乃に確認してもらったのだが、何故2000円？

俺は2000円を払った。なのに2000円が帰ってきた。

……なんで？

「なあ、詩乃、なんで2000円が帰ってきたんだ？」

「え？ 5等が当たったからでしょ？」

「その、5等？ というのが当たると、お金が帰ってくるのか？」

不思議だ、買い物にはお金がかかるのに、お金が帰ってくるなんて。あまり商売に詳しくはないが、これは商売にならなくないか？

「……お兄ちゃん、宝くじって何か分かってる、よね？」

「知らん」

「え？ ……あれ？ この間、宝くじをやるために生まれたとか……まあいいか、あのね、宝くじっていうのは」

それから、妹に宝くじの説明をされた。

よくわからなかったが、とりあえずこの券の番号と、同じ番号があれば、お金がもらえるものらしい。

「そうか、なら、ソードアートオンラインは何等だ？」

「はい？」

「ソードアートオンラインは1等か？」

「なんでいきなりソードアート・オンラインの話が出てきてるのよ」

「クラスメイトが話していたぞ？ 宝くじで72万分の1でソードアートオンラインが手に入るって」

「……お兄ちゃん？ まさか、そんな話を信じたの？」

妹が信じられないようなものを見る目で俺を見てくる。

「違うのか？」

「当然じゃない、まさか宝くじを買ったのって」

「ソードアートオンラインをやるためだ」

「……お兄ちゃん、偶に少しズレてるとは思ってたけど、ここまでなんて」

「？」

「どうしてそんな訳のわからない話をお兄ちゃんのクラスメイトが言っていたかなんて知らないけど、ソードアート・オンラインはゲームなんだから、ゲーム屋さんで買えるんじゃない？」

「ゲーム屋さんというところで買えるのか、よし、そのゲーム屋さんというものを探してくる！」

俺は家を飛び出した。

「あ、待って！ ソードアート・オンラインって、まだ発売前だったはず……行っちゃった……でもお兄ちゃん、生き生きしてた、あんなお兄ちゃん初めて見たかも……ソードアート・オンラインか、ゲームにはあまり興味はないけど、ちょっと調べてみようかな」

俺は、街の人たちに、ゲームさんの場所を聞きながら、ゲーム屋さんを探し回った。

ああ、懐かしい、前世ではよく新しい街に行ったら同じようなことをやっていた。

右も左も分からない場所で、街の人たちに聞きながら目的の場所を探して。

クリフやカズヤ、キズナは真つ先に地図を買い求めていたが、俺は地図なんて読めないから、毎回足で探していたんだった。

あの新しい場所を、なにも知らないところを、自分の足で歩いていく醍醐味が、アイツらはなにも分かっていたいなかった。

地図なんてなくても、人さえいれば目的の場所にたどり着けるといふのに。

結局、ゲーム屋さんについたのは結構時間が経った後だったが、まだソードアート・オンラインは売られていないらしい。ゲーム屋さんで発売日を聞いたから、その日にまた来ようと思う。

そして、発売日。

俺はゲーム屋さんに向かった。だが、ゲーム屋さんの前には、大行列ができていた。

結論から言うと、俺はソードアートオンラインを買えなかった。

どうやら、3日前から並んでいる人間達だけが、ソードアートオンラインを買えたらしい。

知らなかった。

その3日前から並んでいる人間に聞いてみると、どこの店も同じようなもので、今から行ってもすべて売り切れだろうと言っていた。

ソードアートオンラインが、出来ない。

やっと見つけた道が、目の前から消えたような気がした。

ああ、俺はこのままいつまでも、死んでない人生をこの世界で送り続けることになるのだろうか？

前世を永遠と、引きずり続けるのだろうか？

そう、なりそうだ。

俺は、落ち込みながら、足を引きずり、家に帰った。

「ただいま」

「おかえり、どうだった？ って、その顔じゃ聞くまでもないか」

その顔、俺は多分、今絶望している顔なのだろう。

だって、今の俺の気持ちは、どん底だから。

「……ダメ、だった」

「そうだと思った、はい、これ」

ん？ 詩乃が何かよく分からないものを差し出してきた。

「……なんだこれは？」

「なについて、ソードアート・オンラインよ」

「……」

一瞬、詩乃が何を言っているのか分からなかった。

「あの人気じゃ、普通にゲーム屋では買えなさそうだったから、通販で買ったよ、感謝してよ？ それにしても、まさか数秒で売り切れるなんて思わなかったわ」

「……」

これ、これが、ソードアートオンライン。

「……お兄ちゃん？」

これが、これが、これが！

「……詩乃！」

俺は感極まって、思わず詩乃を全力で抱きしめた。

「ちよ、お、お兄ちゃん!? く、苦しいよ！」

「ありがとう！ ありがとう！ 本当に！ 本当に！ ありがとう！」

「……どういたしまして」

「ありがとう！ ありがとう！」

その後、俺は詩乃を抱きしめながら、ずっと感謝を伝え続けた。

その後、俺は、詩乃にソードアートオンラインのやり方を聞いてきた。
た。

ソードアートオンラインをやるには、ナーヴギアというものが
らしい。

それを一緒に詩乃と買いに行き、詩乃が起動方法や、初期設定の
方を調べてくれた。

そして、詩乃に言われるがまま、ナーヴギアを装着して体をぺた
ぺた触った。

なんの意味があるのかは知らないが、何か意味があるのだろう。

……うん、そうだ、全部詩乃がやってくれたようなものだ。

「詩乃、本当にありがとう、詩乃のおかげだ、詩乃がいたから俺はソ

ドアートオンラインをやる、本当に、ありがとう」

「も、もう、なんども聞いたよそれ、……どういたしまして」

「じゃあ俺は、ソードアートオンラインを、やる」

ここで、俺はきつと何かを見つけられるはずだ。

それがなんなのかはわからない。

だが、それがいいものでも悪いものでも、俺は今よりも先に進めるはずだ。

今日から、俺の中の止まった時が、動き出すはずだ。

そういう予感がする。

俺は、ゲームを起動するための言葉を発した。

「リンク・ス」

「あ、ちよつと待って、ソードアートオンラインって、正式サービスはまだみたい」

……もう少し、俺の時は止まったままのようだ。

第3話 アイックラッドへ

「リンク・スタート」

その瞬間、音が遠ざかっていき、視界が暗闇に包まれた。

「な、なんだいきなり!？」

そして、視界の中央から虹色の輪が広がっていった。

俺はいつのまにか変な場所にいた。

さつきまで自宅にいたはずなのに、ここはどこだ？

「詩乃！ 詩乃ー！ ちょっとよくわからないんだが、ここはどこだ

？ 詩乃？ 詩乃ー？ どこだー！ 詩乃ー！」

俺は、なんでも知ってる詩乃に聞こうとした。よく本を読んでいるからな。

だが、いくら呼びかけても、詩乃の返事はない。

どういうことだろうか？ 俺はただソードアートオンラインをや

ろうとしていただけなのに。

ん？ もしかして、それが原因か？

そういえば、確かテレビが、ゲームの中に入るとか言っていたか？

つまり俺は今、ゲームの中に轉移させられているのか。

正直よく分かっていなかったが、人間をゲームの中に轉移させるなんて、最近のゲームと言うものはすごいんだな。

そして、目の前に、名前を入力する場所が出てきた。

俺の名前は朝田志郎だから、そう打とうとしたが、漢字がなかった。ならどうやって名前を入れればいいのだろうか？

もしかして、これは外国人専用なのか？

いや、だがゲーム屋さんの前には日本人がたくさん並んでいたはずだ。

だから、大丈夫だよな？

ここには詩乃はいない。だから俺の疑問に答えてくれる人は誰もいない。

まあいいか、俺はとりあえず「a s a d a s i r o u」と書いて

おいた。

そして、アバターがどうのこうのとなっていたのだが、よく分からなかった。

とりあえず、決定を押ししたら先に進んだから、まあ良かったのだろう。

というより、ここはどこなのだろうか？

そう思っていたら、急に視界が開けた。

そして、俺は見た、もう決して見ることの叶わないと思っていた、懐かしい景色を。

「ここ、は」

広大な石畳、周囲を囲む街路樹と、瀟洒な中世風の街並み。

そして正面遠くに、黒光りする巨大な宮殿。

ここは、間違いない。

ここは俺が、前世で生まれ育った街だ。

一瞬、夢でも見ているのかと思った。

だって、街並みがあまりにも似ていたから。

確かにところどころ変わっているところもある。だけどこの広場は、4人でよく遊び回った、あの。

胸が高鳴り、熱くなった。

「っ、あ？」

気がつけば、視界が歪んでいた。

「何、だ、これ？」

目に水が溜まり、頬を伝い地に落ちた。

ああ、これは、涙か、俺は今、泣いているのか。

俺の涙はとどまることを知らず、流れ続けた。

何故、こいつも感動するのだろうか？ 何故ここまで心が動かされて
いるのだろうか？

それは、もうあの旅立ちの日から、見るものが叶わないと思っていた
た街並みを再び見ることができたからだろう。

今日の前にある、この懐かしい景色を、俺の、故郷を。

「あ、ああ、うあああああ!!!
!!!」

俺はしばらく大声で泣き続けた。

しばらくして、我に帰った俺は、かなり周囲から注目されていた。当然か、こんな街中にいきなり現れたと思つたら、大声で泣き続けているんだから。

いや、いきなり現れる人間は、俺以外にもいるか。とりあえず、あまり注目を集めるのはあれだから、移動するか。

全く、大の大人が情けない。

いくら故郷の景色を見たからと言って、人前で恥も外聞もなく泣きわめくとは。

いや、今の俺は高校生だからまだ子供か？

そういえば、高校生は、大人と子供どちらなのだろうか？

今の世界だと、20歳からが大人だ。

だが、前世では、大きくなれば大人であった。

……わからん、まあいいか、そんなこと。

とりあえず、現状を確認しよう。

俺はおそらくゲーム、ソードアートオンラインの中に転移したと思われる。

以上、現状確認終了だ。

ソードアートオンライン、アインクラッド。

このアインクラッドは、前世のように百層あるのだろうか？

その百層を、俺はまた、駆け上がって行くことができる、という事なのだろうか？

……それは、それはなんとも楽しみだ。

アインクラッドには、数々の思い出がある。

その一つ一つに、また出会えるというのであれば、これほど嬉しい

ことはない。

もしここに、あの3人がいてくれたなら、本当に、最高だっただろう。

だけど、ここには3人はいない。

なら、新たな仲間とともに駆け上がっていけばいい。

新たな仲間と、新たな思い出を作りながら。

詩乃が言っていた。このソードアートオンラインというのは、他の人も一緒に遊べるものだ。

だから、他の人と共に駆け上がって行くのもいいだろう。

もしくは一人で挑戦するのも面白いかもしれない。

さて、これから何をするか。

懐かしい街の探索もいい、新たな仲間を探しに行くのもいい、街の外がどうなっているのかも気になるな。

というより、久しぶりに戦闘がしたい。

街中は衛兵たちが頑張ってモンスターを掃討しているからほぼいないが、街の外にはいるはずだ。

前世ではそうだった。

よし、まずは外に出て久しぶりにモンスターと戦うか。

いや、その前に出来れば剣が欲しいな。

最悪防具はなくてもいいが。

だから武器屋に行くか。

あ、そういえば、今俺は手ぶらだ。ポケットの中を確認してみたが何も無い、完全な無一文だ。

武器を買うお金がない。

当然か、まだお金を稼いでいないんだからな。

だが、武器を買うお金を稼ぐのは大変だ、とても時間がかかる。

どうするか、剣を振り回したくはあるが、しばらくは素手で戦うか。素手で戦ったことはもちろんある。

今生でも、一度だけ素手で戦ったし、前世では、武器が折れて、折れた武器も使い物にならなくなった後には素手で戦っていた。

一応、本格的に教えを受けたこともあるからな。

ああ、懐かしいな。

前世に4人で無手の達人に教えを受けた時のこと、今でも思い出せる。

その場所を見つけたのはたまたまだった。

故郷の街から冒険に出て、一つ上の階層に進んで、そこを隅々まで4人で探索していたとき、街からかなり離れた岩山の山頂近くの、周囲を岸壁に囲われている場所に、泉と一本の樹、そして小屋が建っていたんだ。

なんでこんなところに小屋があるのか気になった俺たちは、その小屋の中に入ってみた。

するとそこには初老の大きな男が座禅を組んでいたんだ。

その男は、どうやら無手の達人で、弟子を募集していたようだった。そして俺たちは、強くなりたかったから、その人の弟子になったんだ。

だけど、修行を受けさせてもらう条件が何より酷かった。

なにせ、両手のみで岩をたたき割れ、だ。

俺たちはすぐに無理だと悟って、帰ろうとしたが、その時、大きな男に証を立ててもらおうと言われて、つつ、ふっ、今でも思い出せる、あの3人の顔っ、思い出すだけで笑いがこみ上げてくる。

まあ、そんなこんなで、十数日かけて岩を叩き割ったわけだが、カズヤなんかは3日で叩き割ってて化け物かと思ったな。

っと、話が逸れてたな。

よし、とりあえず、街の外に行ってみるか。

「おー、こいつはー」

街の外に出てみると、一匹の青いイノシシを見つけた。

「このイノシシ、食べると美味いんだよな」

だが、残念ながら今火を起こせる道具を持ち合わせていない。だから街に持って帰って、どこかで焼いてもらうしかないか。

剣があれば切って持って帰れるんだが、ないものは仕方ない。全部持って帰ろう。

そんなことを考えていたら、イノシシも俺の存在に気づいたようで、直後、俺に向かって突進を仕掛けてきた。

俺はその突進をギリギリまで引きつけて、直前で横にかわしながら、体を回転させ青イノシシの横っ腹を蹴っ飛ばした。

「ぶぎゃー」

綺麗に回し蹴りが入った。

青イノシシは、横たわり、立ち上がりともがいている。

しばらくこういった戦闘をしていなかったから、思うように体が動くか心配だった。

だが、少し体に違和感を感じはするが、問題なく動いているな。

勿論全盛期に比べれば天と地ほどの差はある。だが、それでもこのイノシシ程度に遅れはとるまい。

体の具合を確認していると、青イノシシは立ち上がり、こちらに突進を再度仕掛けてきた。

俺は落ちていた石を拾い上げ、イノシシの上下に揺れる瞳めがけて投石をした。

石は見事イノシシの瞳にあたり、突進が止まった。

俺はその隙にイノシシに接近して鼻っ柱を蹴り上げた。

その後も殴って蹴って、殴って蹴って。

素手で生き物を殺すのはどうしても時間がかかる。

だが、素手でも殴り続ければ、生き物は殺せる。

だが俺は殴っているときに、少し違和感を感じていた。

なんだろうか、何か欠けているような、そんな違和感を。

「ぶぎゃー」

それが何かを考えながら殴っていたら、いきなり青いイノシシの体が、砕け散って消えた。そして目の前に何かの数字が出てきた。

「……は？」

イノシシが、消えた？　なんで？

訳がわからなかった。

確かに素手でも殴り続ければ殺せるとは言った。だが、あんな死に方をする奴なんて今まで見たことがなかった。

普通は死んだら死体が残るはずだ。なのに消え去った。

というより、あのイノシシは本当に死んだのか？ 明らかにまだ元気があった、まだ死とは程遠かったはずだ。

なのに何故？

……考えてもわからない。

だが、残念だ、せつかく懐かしのあのイノシシを食べられると思っていたのに。

「ふぎー」

もう一体、いた。今度は、食べる。

俺はそいつに向かって踊りかかった。

その後、何度やつてもイノシシは食べられなかった。

イノシシ以外にも狼やカブト虫なんかの虫系のモンスターもいたが、そのどれもが、叩きすぎると砕け散って消えてしまう。

かと言って、何度殴つてもいつまでもモンスター達は元気なままで、捕獲なんて出来そうになかった。

勿論、虫を好んで食べる趣味はないし、あまり美味しくないから虫は捕獲する気はなかったが。

一度執拗に青イノシシの足を重点的に攻撃し続けたが、足を折る前に体全体が砕け散ってしまった。

「何故だ」

いい加減お腹がすいてきたから、そろそろ食べたいんだが。

目の前にご馳走の元となる食材がいるのに、いつまでも手に入れない。

そんなもどかしさを感じながら、俺はイノシシや他のモンスター達と戦い続けた。

だが、ダメだった。何度やつてもイノシシは砕けてしまう。

今、ものすごいこの青イノシシの肉を食べたいのに。完全に口が青イノシシの口になっているのに。

食べたい、食べたい、食べたい。

どうにかして食べられないものだろうか？

そうだ、ならイノシシが生きたまま焼けばいいんだ。

なんとか火種を用意して、焚き火を作り、そこにイノシシをおびき寄せて、そのまま焼いて食う！

それしかない！

だが、周りは草原で火を起こす火打ち石もなければ、薪もない。

……諦めるしか、ないか。

だがしかしどうするか。

俺はこのイノシシや、狼などの動物系のモンスターを倒して、街に持って帰って売ろうとしていた。

それを収入源にしようとしていたのだが、死体が消えてしまうのなら、お金を稼ぐ手段がない。

お金がなければいつまでも剣を買えず、素手で戦いかい続けるしか無くなる。

素手にも飽きてきたし、そろそろ久しぶりに剣を振り回したいのだがな。

仕方ない、街に戻って、日雇いの仕事でも探すか。

街の探索もしてみたいしな。

そう思って街にとって返そうとしていたところ、近くに2人の人影が見えた。

2人とも剣を持っている。羨ましい。

一人は動きもぎこちなく、剣に振り回されている感じで、明らかに戦い慣れていない。

あ、イノシシに吹き飛ばされたな、あれは痛いぞ。

俺も昔は、よく青イノシシに吹っ飛ばされたからな。

そして、もう一人はその人間に教えを授けている感じか。

まあいいか、教えている方は、多分それなりに強い。

少なくとも青イノシシ相手に遅れを取る者ではないだろう。

なら、手助けは無用だな。

俺は街に帰っていった。

その途中、また青イノシシが出たから、憂さ晴らしに殴り殺した。

「なあ、キリト、俺の見間違いか？ あいつ、今武器も使わず素手で殴り倒してたぞ？」

「あ、ああ、俺にもそう見えた」

「あいつもβテスターか？」

「いや、あんな素手で戦っていた奴、少なくとも俺はみてないな」

「そうか、にしてもよお、動きすごかったな、なんて言うか、戦い慣れてるつつうか、おめえもあんなことができるのか？」

「いや、流石にあれば、第一ソードスキルを使わないとダメージがあまり入らないからな、現に「フレンジーボア」相手に何発も攻撃をしていたらろう？ だからソードスキルは使ったほうがいいんだよ」

「ふーん、そうか、しっかしよ……こうして何度見回しても信じられねえな、ここがゲームの中だなんてよう」

第4話 デスゲーム

そう言えば、この世界からどうやって元の世界に転移すれば良いんだろうか？

俺が転移してきた場所か？ だけどあそこは広場の真ん中で、特に何があるわけではなさそうだったんだが。

どうすれば良いんだろうか？

詩乃がいたら詩乃に聞けば良いんだが、いないんだから仕方ない、誰か適当な人に聞いて回るか。

誰か知っている人はいるだろう。

街には結構な人がいたしな。

そう思っ、街に向かって歩いてる途中、リンゴーン、リンゴーンという、鐘のような音が大量で響き渡った。

「ん？ なんだ？」

そして、いきなり大きな鐘の音が響き渡ったかと思うと、突如として体が光り出した。

いや、ブルーの光に包まれた、といったほうが正しいか。

「……は？」

そして、青い膜の向こうで、草原の風景がみるみる薄れていった。そして、一瞬光が強くなったと思うと、ゆつくりと薄くなっていた。

だが、薄くなつていく青い光の奥に見える景色は先ほどとはまるで変わっていた。

「な!? なんだ!？」

俺は、さっきまで草原にいたはずだった。

なのに今は、街の広場にいる。

訳がわからない。

いや、もしかして、転移か？

ならここは、ゲームの外？ いや、違う、どうやら最初にゲームに入ったときに来たあの広場に転移されたようだ。

まあ、いいか、歩いて戻る手間が省けたし。

周りを見てみると、かなりの人間がこの場所にいるようだった。先ほど草原にいた2人の姿も見えた。

なんだろう？ この人達も転移させられたのだろうか？

色とりどりの装備、髪色、眉目秀麗な男女の群れ。

凄いな、こんなカラフルな人ばかりは、初めてみたかもしれない。

それが、何千人とこの広場に詰められている。もしかしたら1万にも届くかもしれない。

俺以外の広場にいる人も、どこか困惑している様子だった。

「どうなっているの？」「これでログアウトできるのか？」「早くしてくれよ」「ふざけんな」「GM出てこい」

何だかイライラしている様子だ。

ああ、そうか、俺は最初から街に戻るつもりだったから、正直転移してくれてありがたかったが、他の人たちは食事中だったり、睡眠中だったり、もしくは他の街に行っていたのかもしれない。

さっきの二人も青イノシシと戦っていたし、戦闘中にここに戻されたなら、たまったものではないか。

声の中には一部理解できない言葉があったが、概ね間違っていないだろう。

そんなことを考えていたとき、不意に、それらの声を押しつけ、誰かが叫んだ。

「あつ……上を見ろ!!」

上？

俺は上を見上げた。

すると、空に真っ赤な文字が浮かんでいた。

えっと、「Warning」と、「System Announcement」と書かれていた。

えっと、ワーニング、システムアナウンスメント？

何かの警告だろうか。

とりあえずここから離れたほうがよさそうだな。

俺は人混みを抜けて広場の外に向かった。

「いっー」

しかし、広場から出ようとしたとき、透明な壁に激突した。

「……たくない？」

痛みがない？ 俺は今思いつきり壁に鼻からぶつかっただが、違和感を感じただけで、痛みは感じなかった。

「あ、そうか、さつき青イノシシを殴っていたときに感じていた違和感
はこれか」

拳で殴ると、当然拳が痛む。

だけど、青イノシシを殴ったとき、拳に痛みがなかった。

誰かを殴るなんて久しぶりだったから、すぐに違和感に気づけなかった。

もしかしたら、このゲームの世界では、痛みを感じることができないのだろうか？

痛みとは生き残る上でとても大切な警告だ。

特に本能型の俺のような人間にとっては。

俺の体を一番よく理解しているのは俺じゃない、俺の体だ。

だから俺はこれまで体の言うことを聞いてきた。

いつまで戦えるのか、限界はどこか、まだやれるのか、やめたほうがいいのか。

そういったことを体は教えてくれていた。

だが、痛覚が封じられてしまっているのなら、感覚が狂ってしまう。

限界がわからなくなってしまう。

「不味いな、どうにかして痛覚が復活してくれないことか」

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

「ん？」

上から、声が聞こえてきた。

俺は振り返って上を見上げた。

そして、俺は、自分の目を疑った。

目の前の光景が、信じられなかった。

今、俺の目の前には、大きな、大きな、信じられないくらい、とても巨大な人が浮かんでいた。

その大きさだけでも異常なのに、さらには宙に浮いている。

ありえない光景を前に、一瞬、夢でも見ているのかと思った。
いや、人、なのか？ フードを被っているが、フードの中は空洞だ。
そして、人は空に浮かない。
つまり、あれは。

「幽霊？・亡霊？」

キズナが見たら卒倒しそうな光景が、目の前にあった。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

茅場晶彦？ どこかで聞いたことがあったような？

確か、テレビが話していたような……ダメだ、忘れた。

しかし、その茅場晶彦と言う人は、死んでしまったのか。

幽霊は、現世に強い未練を持つものになるって聞いたことがある。
きっと、凄惨な執念を持っていたのだろう。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返し。これは不具合ではなく、『ソードアート・オンライン』本来の仕様である』

何を言っているのかわからなかった。

日本語を話してほしい。

プレイヤー諸君とは、もしかしたらこの広場に集められた人達ことか？

メインメニュー？ なんだそれは？

ログアウトボタン？ そう言えばさつき広場の誰かが同じようなことを言っていた気がするな。

不具合？ 仕様？

だめだ、俺には難しすぎて訳がわからない。

とりあえず、あの亡霊は俺たちに何かを伝えたいのだろう。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない』

だからログアウトとはなんだ？

『また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り

得ない。もしそれが試みられた場合——ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

えつと、ちよつと待つてくれ、まだ理解が追いついていないのにそんな次から次へと訳のわからないことを話さないでくれ。

話し方が難しすぎる、もつと簡潔に話してくれないと分かる訳ないじゃないか。

ざわ、ざわ、と、集団のあちこちがざわめいている。

やはり、皆理解できていないのだろう。

良かった、もしみんなが理解できていて、俺だけ理解できていなかったら、俺が馬鹿みたいではないか。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み——以上のいずれかの条件によつて脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局およびマスコミを通じて告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果——残念ながら、すでに二百十三名のプレイヤーが、インクラッド及び現実世界からも永久退場している』

やめてくれ！ これ以上専門用語で訳のわからない話を続けないでくれ！ もつとわかりやすく頼む！ 誰も理解できてないから！

みんなポカーンとしているのがわからないのか!?

どこかで一つ悲鳴が上がった。

俺も訳がわからなすぎて叫びたい。

確かに何個か聞き覚えのある単語はあった。ナーヴギアとかは。

ナーヴギアは、この世界に転移するのに必要な道具だったやつだ。だけど、それ以外訳のわからない話ばかりしているし、213名が退場しているとか言ってたけど、なんの話をしているんだ？

頑張つて理解しようと努めたが、これは無理だな。諦めて聞いているフリをしておこう。

『諸君が、向こう側においてきた肉体の心配をする必要はない。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ていたことも含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴギアが強引に除装される危険性はすでに低くなっていると云ってもよからう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、嚴重な介護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には安心して……ゲーム攻略に勤しんでほしい』

話が長い。

透明な壁は解除されないし、よくわからない話を永遠に聞かされて、ちよつと参つてきた。

校長先生の話くらいに長いぞ。

誰かが叫んでいる。きつと話が長いことに怒っているんだろう。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって、《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実というべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に——諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

ん？ ソードアートオンラインの話が出てきたな。

ゲームではない？ あれ？ ソードアートオンラインってゲームじゃなかったのか？

蘇生手段ってなんだ？ ヒットポイント？ 亡霊はまた訳のわからない専門用語を話している。

ダメだ、分かん。

なんか重要そうなことを話している気はするんだが、もう少し理解しやすく話してほしい。

『諸君がこのゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッド最上部第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保障しよう』

ん？ アイנקラッド最上部第百層？ もしかして紅玉宮のことか？

この亡霊は、俺たちにそこに行つてほしいと頼んでいるのだろうか？

もしかしたら、亡霊の未練は、紅玉宮にあるのかもしれない。

「で、できるわきやねえだろうが!! ベータじやろくに上がれなかつたつて聞いたぞ!!」

ん？ 誰かの声が聞こえてきた。

あー、まあそうだよな、ここから第百層までなんて、何十年と時間がかかるからな。

時間が余っているやつや、暇なやつ、前世の俺たち4人みたいに酔狂な奴らならともかく、他の人は嫌だろう。

第一前世では、登つていくのは個人の自由だったはずだ。誰かに強制されることじゃない。

他の人たちもどよめいている。やっぱりみんな否定的なんだろう。

亡霊も頼み方つていうものがなっていない。もつと話をわかりやすくしてくれれば、誰かは願いを聞き届けるかもしれないのに。

まあ、俺は登つてみたくはあるから、ついでに、亡霊の願いを叶えてもいいんだがな。

『それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

亡霊がプレゼントをくれるらしい。もしかして、報酬を先払いして頼みを断りにくくする作戦かもしれない。

しかし、アイテムストレージとはなんだ？

どこかにアイテムストレージという場所があるのだろうか？

確認してくれ給えて言われても、今透明な壁があつて広場から出られないんだが。

すると、突然、周りの人間を白い光が包んだ。

「なんだ？」

その光は2、3秒で消えた。

今の光はなんだろうか？

……ん？ さっきまで見ていたものと何かが違うような気がする。

なんだろうか？ 光に包まれていた人たちが、なんとなく何かが変わったような。

これは、あれだ、この間詩乃が見ていた、間違い探しのようなものだ。

何が変わったのだろうか？

……あ、分かった、みんな背が低くなっているような気がする。

いや、気のせいかな？ だけど下がっているような、下がってるような？

とにかく、あの光はみんなから身長を奪って行ったのだろうか。

はっ！ 分かった！ あの巨大な亡霊は、他の人から身長を奪って大きくなっていったんだ。

あんなに大きいのはおかしいと思っていたが、そういうことだったのか！

これはあれだ、皆があまりにも乗り気ではなく、このままでは誰も第百層に向かってくれないと思った亡霊が、身長を奪って皆を脅しているんだな。

身長を返して欲しければ第百層まで行けと。

なかなかの策士かもしれない。

人によっては身長というのはかなり大切なものだからな。

だが、そうなる何故俺からは身長を奪わなかったのだろうか？

もしかしたら、俺は第百層まで行ってもいいと思っていたからか？

『諸君は今、なぜ、とまっているだろう。なぜ私は——SAO及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？ これは大規模なテロなのか？ あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？』と』
SAOというのが何かはわからないが、茅場晶彦という人はナーヴギアの開発者だったのか。

こんなことをしたのか？ つまり皆から身長を奪ったことを言っ

ているのだろう。

大規模なテロ？　あまり身長に頓着しない人なら別にいいのかもしれないが、気にしている人にとってはテロだろう。

身代金目的の誘拐、この亡霊はお金欲しさに皆から身長を誘拐したのか。

確かにお金を払って身長が戻るなら、お金を払う人もいるかも知れない。

『私の目的は、そのどちらでもない』

あれ、違ったのか。

ああ、そうか、紅玉宮のある第百層に行つて欲しいんだったな。

『それどころか、今の私は、すでに一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、私にとつての最終的な目的だからだ。この世界を創り出し、観賞するためにのみ私はナーヴギアを、SAOを造つた。そして今、全ては達成せしめられた』

目的を持たない？　この状況が最終的な目的？

なるほど、報酬の先払いと、身長という人質を取つて、皆に自発的に第百層を目指させる状況を作ることが、この亡霊の目的だったのか。

飴と鞭という奴だな。

そして、皆が第百層まで登る様子を見ていたいと。

『……以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』

そう言つて、亡霊は上昇していき、空中に浮いていた血のような色の水面に沈んで行つた。

いや、上に浮いていた水面に下から入っていく場合、沈んだでいいのだろうか？

いや、それはいいか。

取り敢えず、あの亡霊が言いたかつたことをまとめるか。

まず、あの亡霊は茅場晶彦という人の亡霊で、あの亡霊は俺たちに第百層を目指してほしいということだ。

そして、その報酬は、すでにどこかに用意されていて、それでもや

る気を示さなかった人からは身長を奪い、返して欲しければ第百層まで行け、ということだろう。

それで、亡霊の真の目的は、皆が頑張って登っていく姿を眺めたい、といったところか。

成る程、なんとなく分かった。

俺は全然、第百層を目指すのもいい。

むしろ、いつかは行こうとしていた。

だけど、もう結構お腹が空いているんだ。

一度家に帰って食事をしたい。

多分詩乃も待っていることだろうしな。

だから一度帰ってから、第百層を目指すでしょう。

そう決めた俺は、この広場にいる人から、元の世界に転移する方法を聞こうとした。

「すまな——」

その瞬間、広場の人間たちが、一斉に大声で言葉を発し始めた。

つまり、圧倒的なボリウムで放たれた多重の音声で、広大な広場をびりびりと震動させた。

第5話 決意

「嘘だろ……なんだよこれ、嘘だろ！」

残念ながら、あなたの身長は取られた。嘘ではない。

「ふざけるなよ！ 出せ！ ここから出せよ！」

もう広場から出られるぞ？ いつの間にか透明な壁がなくなっていたからな。

壁から少し離れているから気づいていないのか？

「こんなの困る！ このあと約束があるのよ！」

ああ、知人に身長が縮んだところを見られたくないんだろうな。

「嫌ああ！ 帰して！ 帰してよおおお！」

そんなに返してと絶叫するほど身長を取られたことが嫌なのか。

悲鳴。怒号。絶叫。罵声。懇願。そして咆哮。

身長を取られ、小さくなってしまった人間たちは、頭を抱えてうずくまり、両手を突き上げ、抱き合い、あるいは罵り合った。

……いや、流石に反応が大きすぎではないか？

全員が全員、身長を取られたわけではなかったと思っただが。

それに、もし仮に俺以外の全員が身長を取られていたのだとしても、全員が全員、身長をそこまで重視しているとは思えないのだが。

いや待て、もしかしたら先ほどの亡霊の話の中に、何か俺が聞き逃した重大なことがあったのか？

大半が小難しい話で理解できなかったが、この人たちは俺よりも少し理解ができていて、そこに何か重大なことがあった、と言うことが考えられる。

もしくは、皆と俺とでは、亡霊の話の解釈に認識の違いがあったのか。

俺は、何かを勘違いしているのか？

確認したいが、今この人たちに聞ける雰囲気ではないな。

どこか冷静そうな人はいないものか。

そうして周りを見渡していると、この広場から離れていく黒髪の少年と、逆立った赤髪の男の2人組の姿が見えた。

あの人たちは冷静そうだ。
よし、2人を追いかけて少し尋ねてみるとしよう。
俺はあの2人を追いかけた。

見失った。

こっちの方に行っただと思っただが。

しばらくこのあたりをうろろしていたが、見つけれなかった。
仕方ない、一度広場に戻るか。

少し時間も経ったことだし、あの広場の人たちも冷静になっている
かもしれない。

しかし本当にお腹が空いた。

早く家に帰って詩乃と食事を取りたいものだ。

そうして広場に戻ろうとした時、広場を離れた2人のうちの1人を
見つけることができた。

黒い髪の少年の方ではなく、逆立った赤い髪の男の方だ。

「すまない、少しいだらうか?」

「あん? 誰だ、つて、あんた、あん時の……ん?」

「俺のことを知っているのか?」

この男とは、初対面だと思っただが。

「ああ、いや、何でもない、で、なんか用か?」

「いや、先ほどの広場での話がよく理解できなくてな、誰かに聞いた
かったんだ」

「ああ、まあ、理解したくねえ気持ちもわかるぜ、俺だってまだ信じら
れねえしな」

「そうか」

この人も、身長を取られてしまったのだろうか?

「で、何が聞きたいんだ? つつても、俺だって全部理解できたわけ
じゃねえからよ、答えられるか分からんぜ?」

何が理解できなかったかと言ったら、一部以外全て理解できなかった

た。

「だけど、なんと聞いたらいいのだろうか？」

「全てが理解できなかった、では、教える方も困るだろう。」

「なら、今一番知りたいことを聞くとするか。」

「今一番聞きたいことはこの世界から元の世界への転移方法だ。」

「先ほどの話とは関係ないかもしれないが、聞いてみよう。」

「元の世界に戻る方法、なんだが」

「あー、正直それは半信半疑だわな、ゲームのクリア、つまり第百層の攻略でしかこの世界から出られねえなんてよお」

「……第百層、攻略？ 他に、元の世界に戻る方法は」

「残念ながら、今んとこ無さそうだ」

「つまり、元の世界への転移装置か何かは、第百層にしかない、というところか？」

「もしくは、あの亡霊が本来あったはずの転移装置を破壊、もしくは使用不可にしてしまい、第百層のものしか使用できなくしてしまったのか？」

「そういえば、あの亡霊、ナーヴギアの開発者と言っていたはずだ。」

「ナーヴギアは、この世界に入る時に使った頭からかぶる転移装置のことだ。」

「なるほど、転移装置の開発者の亡霊だから、転移装置を操れるというところか。」

「……と、いうことは、だ。」

「すぐに元の世界には、戻れないのか」

「あー、いや、これが悪趣味なイベントの演出つつう可能性もあるからよ、案外すぐに戻るかもしれないねえぜ」

「そう、か、分かった、ありがとう」

「よく意味はわからなかったが、すぐに帰れる可能性もあると言っているのだろう。」

「だが、確率は相当低いんだろうな。」

「顔や声色を聞けばわかる。」

「今の言葉は、俺を励ますために言ったのだろう。」

いい奴だ。

「もういいか？　じゃあ、俺は行くぜ、広場にダチ残してきちまってるからな」

「ああ、助かった」

「いいってことよ、じゃあな！」

そう言っつて、逆立った赤髪の男は広場の方に去って行った。

っ、そうか、そういうことか。

あの広場での狂乱は、身長を取られただけで起こったわけではなかったのだな。

おそらく、直ぐに元の世界へ転移する方法が無くなったから、あれだけの騒ぎが起こっていたのか。

つまり俺は、しばらく、数十年は詩乃と、家族と会えなくなるということか。

それは、寂しいな。

……随分と、冷静だな。

それもそうか、正直、まだ俺はあの世界で生きている実感が少なかった。

人との関わりも、家族以外とはろくにとっていないし、繋がり自体が少なかった。

勿論、できれば一言、俺は大丈夫だと詩乃に伝えたくはある。

だが、それだけだ。

母は、むしろ俺がいない方がいいだろうしな。

それに、この世界は俺の前世にかなり似ていることも、冷静でいられる理由の一つなのだろう。

かなり不謹慎ではあるかもしれないが、俺は今の状況に、楽しみすら覚えている。

また、このインクラッドを1から登ることができることに、嬉しさを感じている。

だから冷静でいられるのだろう。

しかし、あの広場の人たちは、元の世界に繋がりが強い人たちなのだろう。

そんな人たちが、元の世界に戻れずに、ここで十数年も過ごすといふことになったら、発狂したくもなるかもしれない。

「……そうか、帰るためにも、行かなければならないんだよな、第百層に」

第百層まで登る頃には、俺の未練は晴れるだろうか？

正直、何が俺の未練なのか自分にも分かっていない。

なんとなく、思い当たるものはあるが、それだけだ。

でも、なんとなく、元の世界に帰るまでには、未練が晴れている予感がする。

そんな気がする。

「なら、行かなきゃな、第百層に」

本当は、この街で仕事を探して、お金を稼いで、武器や防具を整えてからの方がいいのだと思う。

でも、今の俺は先に進みたいと思ってしまった。

この思い出の街の中で、思い出に耽るより、今は先に進みたいと。

「なら、行くか、思ったように、感情に身を任せて」

俺は、進み始めた。

時は少し遡る。

2022年11月6日、日曜日、午後1時。

「お兄ちゃん、楽しんできてね」

「ああ、行つてくる、詩乃」

お兄ちゃんは、ナーヴギアを被り、ベッドに横たわった。

「リンク・スタート」

その声とともに、お兄ちゃんは眠ったように動かなくなった。

実際に眠ったわけではなく、お兄ちゃんは今、ナーヴギアによって、

意識だけをゲームの中に飛ばしている。

フルダイブ、すごい技術だと思う。

ナーヴギアは、脳そのものと直接接続して、目や耳ではなく、脳の視覚野や聴覚野などの五感にダイレクトに感覚を送る。

そして、それだけではなく、脳から自分の体に向けて出力される命令を、遮断、回収して、ゲーム内のアバターを動かすためのデジタル信号に変換する。

つまりお兄ちゃんは、今、ここにいるようでここにいない。

たとえば今、私がお兄ちゃんの体に何をしようともお兄ちゃんは気づけない。

やりたい放題、という訳だ。

「……お兄ちゃんの寝顔、初めて見るかも」

お兄ちゃんは、眠っている姿を他人に見せない人だ。

こんな無防備に眠っている姿なんて見たことがない。

一時期、どうしてもお兄ちゃんの寝顔が見たかった時期があって、真夜中にこっそり部屋に入ろうとしたり、一緒のベッドに入って、お兄ちゃんが寝るまで起きていようとしたことがあった。

だけど、どれだけ真夜中でも、こっそりできるだけ音を立てずに部屋に入ろうとしても、部屋の入り口に立っただけでいつでもお兄ちゃんは返事をする。

お兄ちゃんが寝るまで起きていようにも、いつまで経ってもお兄ちゃんは眠ってくれず、いつも私が先に眠ってしまう。

だから、こんな無防備に眠っている姿は、初めて見る。

「……フフ」

これだけで、ソードアート・オンラインを買った甲斐があった。

別に、無防備なお兄ちゃんに何かをするつもりはない。

お兄ちゃんは、意外と勘が鋭い。

もしここで私がお兄ちゃんにナニカをしたら、お兄ちゃんが戻ってきたときに、バレて嫌われてしまうかもしれないから。

だけど、こうやって寝顔を眺めるだけなら、いいよね？

今日1日は、ここでお兄ちゃんを眺めていようかな。

……

珍しいものだからか、それともお兄ちゃんだからか、いつまで眺めていても飽きる気がしない。

いつからだろう、こんな気持ちをお兄ちゃんに抱くようになったのは？

子供の頃は、ここまでではなかった。

いや、むしろ嫌っていた。

お兄ちゃんは、今も昔も変わらずだ。

いつも体を鍛えている。逆に言えば、体を鍛えてしかいない。

つまり、あまり周りに関心を示そうとしなかった。

私のお母さんは、一言で言えば、弱い人だ。

儂く、傷つきやすい、少女のようだった。

だから、自然と、物心がつくにつれて、私がしつかりしなければと思ってしまうようになった。

お兄ちゃんは、お母さんに寄り添おうとはしなかったから。

だから私が、お母さんを守らなければ、と。

お兄ちゃんは、きつと私達に興味が、関心が無いんだとずっと思っていた。

その認識が変わったのはいつだっただろうか。

きっかけは多分、私が9歳の時だ。

祖父母が外出中、しつこい訪問販売の男が玄関に居座って、お母さんが怯えてしまったことがあった。

だから私とその男を追い払おうとした。

けど、私は怖かった。

当然だ、相手は大人の男の人。見上げるような大きさの人間だ。

でも、お母さんを脅かす人をそのままにはできない。

私がお母さんを守るんだ、守らなければ、とそう思って、私は玄関に向かった。

その時、私はお兄ちゃんに肩を掴まれた。

そして、私に一言。

「詩乃、俺がやる、だから母を、頼む」

そう言つて、お兄ちゃんは訪問販売の男を追い払つてくれた。
この時から、少しだけお兄ちゃんの印象が変わつた。
それでも、まだ私はお兄ちゃんが嫌いなままだつた。
それが決定的に変わったのは、あの事件の後からだ。

第6話 過去

11歳、私が小学生5年生になった頃は、あまり外で遊ばず、学校からまっすぐ帰ってきては図書館で借りた本を読むのが日課だった。成績は良かったが友達は少なかった。

二学期に入つてすぐの、ある土曜日の午後。

私とお母さんとお兄ちゃんは、連れ立って近所の小さな郵便局に出かけた。

客は、他には一人もいなかった。

お母さんが窓口で書類を出している間、私は局内のベンチに腰掛け、足をぶらぶらさせながら持参した本を読んでいた。タイトルは覚えていない。

お兄ちゃんは、特に何をするでもなく、ぼーっとしていた。

昔は外でも腕立て伏せや逆立ちをしていたから、私は怒って、お兄ちゃんに外では目立ったことはしないように言った。

平穏を好むお母さんの為に。

その後、お兄ちゃんがトイレに行つて、少しした後、一人の男が入ってくるのが見えた。灰色っぽい服装で、片手にポストンバッグを下げて、痩せた中年男性だった。

男は足を止めて局内をぐるりと見渡していた。

その時、私と一瞬目があつた。

私は、瞳の色が変だな、と思った。

その後男は、早足に窓口に向かつていき、銀行の窓口で何かの手続きをしていた私のお母さんの右腕をいきなり掴んで引っ張って、そのまま突き飛ばした。

お母さんは声も出せずに倒れ込み、ショックのあまり目を見開いて凍り付いていた。

私は理不尽な暴力を振るつた男が許せず、大声で抗議をしようとした、その時。

男はカウンターにどさつとおいたポストンバッグの中から、拳銃を掴みだし、男性局員に拳銃を突きつけた。

ピストル——オモチャ——いや本物——強盗——!?

と、いくつもの単語が詩乃の意識を横切った。

「この鞆に、金を入れろ！」

男が、唖れた声で喚いた。すぐさま続けて、

「両手を机の上に出せ！ 警報ボタンを押すな！ お前らも動くな！！」

男が拳銃で、局員たちを脅しながらそう言った。

私は、すぐに局から走り出して、外に助けを呼ぶべきかと考えた。しかし、倒れたままのお母さんを残していくことはできなかった。躊躇しているうちに、男が再び叫んだ。

「早く金を入れろ!! あるだけ全部だ!! 早くしろ!!」

窓口の男性局員が、顔を強張らせながらも、右手で5センチほどの厚さの札束を差し出した——

その瞬間だった。

男が、拳銃を、発砲した。

その弾丸は、カウンターの向こう側の男性局員に当たり、男性局員は目を丸くしながら胸元を両手で押さえながら後ろに倒れた。

「ボタンを押すなと言ったろうがあ!!」

男の声は甲高く裏返っていた。

「おい、お前！ こっちに来て金を詰めろ!!」

男が拳銃を向けた先には、二人の女性局員固まって立ち尽くしていた。

「早く来い!!」

男の声が鋭く響いたが、女性局員は首を細かく振るだけで、動こうとはしなかった。

男は苛立ちのままにカウンター下部を何度も蹴り飛ばしてから、更にもう一人撃とうと考えたのか、拳銃を握った右腕を再び持ち上げた。

高い悲鳴を上げて、女性局員たちがしゃがみこんだ。

だがそこで、男は体を半回転させ客用スペースに向き直った。

そして男が拳銃で、床に倒れてているお母さんを狙いを定める瞬

間。

「早くしグハツ」

誰かが男に飛びかかり、殴り飛ばした。

その誰かとは、私のお兄ちゃんだった。

「……何をしている」

「あ？ あ、あああ!？」

男は、殴り飛ばされたことを、とっさに理解できていなかったのか、一瞬惚けていたが、すぐにその顔を怒りで染め上げてお兄ちゃんに向けていきなり拳銃を放った。

その銃弾は、お兄ちゃんの右腕をかすめた。

お兄ちゃんの右腕から、少なく無い量の血が溢れ出した。

「つく、思ったよりも早かったか」

そう言つて、お兄ちゃんは男に向かって走り出した。

「あああ!!」

そして、お兄ちゃんはもう一発放たれた至近距離からの銃弾を、今度は紙一重で横に避け、男の持っていた拳銃を右足で蹴り飛ばし、そのまま体を回転させながら、左足の回し蹴りを男の頭に当てて、男を蹴り飛ばした。

「ガッ!」

そして、男は動かなくなった。

「っ、久しぶりだな、この痛み」

お兄ちゃんは右腕を抑えて、少し苦しそうにしていた。

私はお兄ちゃんに駆け寄った。

「お、お兄ちゃん!? 大丈夫!？」

「ああ、俺は大丈夫だ」

「でも、血が」

その出血量は、多いとは言えないかもしれない。

だけど、決して少なくは無い。

「安心しろ、この程度なら問題ない、それよりも詩乃、母を頼む」

「え?」

「母の心が、また壊れかかっている」

私は振り返って、お母さんを見た。

そこには、床に倒れて恐怖に顔を歪ませている母の姿があった。「今俺が行っても、きっと母を怖がらせるだけだろう、だから今、母を支えられるのは詩乃だけだ、頼む」

お兄ちゃんの目には、お母さんを心配する色だけが見えた。

きっと今も右腕に激痛が走っているはずなのに。

この言葉を聞いて、今までずっとお兄ちゃんのことを誤解していたことに気がついた。

お兄ちゃんはずっと、私たちのことに興味がないんだと思っていた。

でも、今のお兄ちゃんの瞳を見て、自分のことよりもお母さんを心配するお兄ちゃんを見て、お兄ちゃんが、ちゃんと家族を大切に思っていたことが分かった。

不器用だから、うまく表に出せていなかっただけで、きっと心の中ではずっと私達を心配してくれていたんだろう。

「……うん、分かった」

そして、私は倒れているお母さんのところに向かって歩いて行った。

「……ああああ」

その途中、どこかからか、小さなうめき声が聞こえてきた。

「……ああああああ!!!」

「……え？」

その声の方向を向いた私は、地に倒れながらも、真つ黒な拳銃の銃口を、私に向いている男の姿が見えた。

まだ意識が!?　なんで、拳銃を!?　さっきお兄ちゃんが蹴り飛ばしたはずなのに!

その時私は、咄嗟のことで固まってしまつて動けなかった。

だけど、流れる時間がゆっくりと感じ、やけにはつきり拳銃の銃口と、男の指がゆっくり動いている景色が見えた。

その指が、引き金に触れ、ゆっくり引きしぼられていき、そして。

「詩乃おおお!!!」

その瞬間、私はそこから勢いよく押し出された。

私の体がもともとあつた場所には、お兄ちゃんの姿が。

「ガッ」

そして、お兄ちゃんのお腹を、銃弾が貫いた。

「っ、うおおおおおおああああああ!!」

お兄ちゃんはお腹に穴を開けながらも、咆哮を上げ、男に向かつて走り出して行った。

「あ、ひっ」

お兄ちゃんの咆哮に怯んだのか、もしくはお兄ちゃんの顔がよつぽど怖くなっていったのかは分からないが、男は恐怖を顔に貼り付けて、咄嗟に動きを止めてしまった。

その間に、男の元までたどり着き、お兄ちゃんの拳が、地に伏せて顔を上げていた男の脳天に突き刺さり、男は白目を向いて今度こそ動かなくなつた。

そしてお兄ちゃんは、男の拳銃を遠くに蹴り飛ばし、お腹を抑えながら、顔を歪めて、その場に座り込んでしまった。

「っ！ お兄ちゃん!？」

お兄ちゃんのお腹からは、右腕よりも沢山の血が溢れ出していた。

「詩乃、無事か？」

こんな時でも、こんなボロボロになつても、お兄ちゃんは真つ先に私のことを心配してくれていた。

「っ大丈夫だよ、お兄ちゃんが庇ってくれたから」

「っ、そうか、良かった」

お兄ちゃんは心底安心したような笑みを浮かべた。

「お兄ちゃん！ 嫌、死なないで！」

お兄ちゃんの血は止まらない。

「なに、安心しろ、これくらいなら、死にはしない、鍛えているからな」
「でも、こんなに血が！」

「人間は、そんなにやわじやないさ、そんなことより、母を、頼む」

「でも！ お兄ちゃん！」

お兄ちゃんはこんなに傷ついているのに！

「詩乃、肉体はすぐに治る、だが、心はそう簡単には治らない、今、ここで母を支えなければ、母の心は壊れてしまう、これは、詩乃にしか出来ないことなんだ、だから、俺のことは気にせず、母の心を守ってくれ」

確かに、私はお母さんを守らないといけない。

私は、お母さんを守らないと。

でも、でも、血だらけのお兄ちゃんを、放っておくことなんて。

「詩乃、頼む、俺は大丈夫だから」

その顔には、強がりではなく、確かな自信があつた。

俺はこの程度じゃ死なないって言う、自信に満ち溢れていた顔で、その顔を見ていたら、お兄ちゃんは大丈夫な気がしてきた。

「……うん」

私は、お兄ちゃんの元を離れて、愛するお母さんの元に向かった。

お母さんは数メートル離れた床に倒れたままだつた。

そのお母さんの顔には、明らかな恐怖と怯えの色が見えた。

お母さんの視線の先には、地に伏した男がいる。

無理もない。私のお母さんは心の弱い人だ。

平穏と静寂のみを欲する人だから、こんなことがあつて、平然としていられないのは当然のことだ。

「お母さん、もう大丈夫だから」

私はお母さんを安心させるために、ゆっくりお母さんの背中をさすった。

「もう、なにも危険なことはないから、全部、お兄ちゃんがやつつけてくれたから、だから大丈夫だよ」

？ お母さんの顔が、一瞬さらにこわばつたような？

「大丈夫、大丈夫だよ、お母さん」

私は警察と救急車が来るまで、お母さんを優しくさすりながら、言葉をかけ続けた。

でも、お母さんの顔から、恐怖と怯えの表情が、取れることはなく、ただただ、あの男を見続けていた。

そして、救急車がやってきて、お兄ちゃんが運ばれて行った。

その時、今まで反応のなかったお母さんが、少し反応を示した。お母さんは、お兄ちゃんの方を見ていた。やっと、お母さんがあの男から視線を外してくれた。良かった。

きつとお母さんも、お兄ちゃんが心配なんだろう。だから、お兄ちゃんは大丈夫だって、安心させないと。

「お母さん、お兄ちゃんは大丈夫だよ、お兄ちゃんは……え？」

その時、お母さんの顔を見た私は、自分の目を疑った。だって、そこにはきつと、お兄ちゃんを心配する顔があると思っただから。

でも、お母さんの顔にあった表情は……

先ほどと変わらない、恐怖と怯えの表情だった。

「お母、さん？」

何かの間違いだと思って、私は視線の先を追った。

しかし、そこには、あの男の姿はなかった。

あるのはお兄ちゃんの姿だけ。

あの男は今だに地に伏せたままだ。

……もしかして、最初から、お母さんはお兄ちゃんしか見ていなかった？

お兄ちゃんは、あの男の横で座り込んでいた。

だから、最初から、お母さんが怯えていたのは、怖がっていたのは……お兄ちゃん？

「なんで」

なんでお母さんはお兄ちゃんを怖がっているの？ お兄ちゃんは、あんなにボロボロになってまで、私達を守ってくれたんだよ？

もしお兄ちゃんがいなかったら、私達、どうなっていたか、分からないんだよ？

お兄ちゃんは、あんなにボロボロになっても、自分の心配じゃなくて私たちの心配をしてくれていたんだよ？

なのに、なんで？ なんで、なんで、なんで！

私は、初めて愛するお母さんに、怒りを覚えた。

「……っ！」

でも、私はその怒りを必死で飲み込んだ。

私はお兄ちゃんからお母さんを任されたんだ。

私しか、お母さんを支えられる人がいないからって。

私なら、お母さんを支えられるって、信じてくれたんだ。

なのに私がここで怒りに身を任せたら、お兄ちゃんの信頼を裏切ることになる。

だから私は、お母さんを安心させるための言葉を話し続けた。

そして、お母さんは、お兄ちゃんが見えなくなつてから、その恐怖と怯えの表情が薄れていき、やがて眠ってしまった。

お母さんはその後病院に運ばれ、私はパトカーに乗せられた。

私は父親の顔を知らない。

現実世界における父親の記憶がないと言う意味だけではない。文字通り、写真や映像においてすら、父親なる人物を見たことがないのだ。

父親が交通事故で他界したのは、私がまだ2歳にもならないからだったらしい。

その日、父親とお母さん、お兄ちゃんと私の親子4人は、年末を母方の実家で過ごすため、自動車で東北のとある県境、山の斜面に沿って伸びる片側一車線の旧道を走っていた。

東京を出るのが遅れ時刻は夜11時を回っていたそうさ。

事故の原因は、現場のスリップ痕から、カーブを曲がりきれず対向車線に膨らんできたトラックだと断定されている。

トラックの運転手は、フロントガラスを突き破って路面へと投げ出されてほぼ即死。

右側面を直撃された小型車は、ガードレールを超えて山の斜面に転落し、二本の樹に引つかかって停止した。その時点では、運転していた父親は、意識不明の重傷ではあったものの、即死には至らず、助手

席の母親も左大腿の単純骨折のみ、後部座席のチャイルドシートでしっかりとベルトをかけられていた幼い私と、お兄ちゃんはほぼ無傷だった。しかし、当時の記憶はかけらも残っていない。

不運だったのは、その道が地元でもほとんど使用されておらず、特に深夜ともなれば全く往来が途絶え、また衝突のショックで車内の携帯端末が破損したことだった。

この時、車の中で動けた人間は、当時、まだ5歳だったお兄ちゃんだけだったそう。

お兄ちゃんは、私達を助けるために、冬の山を単身降って助けを求めに行ったらしい。

割れた窓ガラスから、小さな体で車を抜け出し、車の引掛かっている木を伝って、地に降りると、山を降り始めたそう。

年末で、深夜の山を5歳の子供が、

当然、それは無理がありすぎた。

だが、それでもお兄ちゃんは私達を助けるために一人で山を下ったよう。

結果としては、お兄ちゃんは人里まではたどり着けなかった。その前に力尽きて倒れたそう。

だけど、人里近くまでは降りられたようで、偶然近くを通りかかった人がお兄ちゃんを保護し、その人がお兄ちゃんから事情を聞き、通報をしたため、私とお母さんは助かった。

だけど、お父さんは間に合わなかった。

救急車に乗せられるまでは、まだかろうじて息があったものの、病院に着くまでに息を引き取ったそう。

お母さんは救急車が来るまでの間、内出血によってゆっくりと冷たい死に至っていく父親を、隣でただ見ていることしか出来なかったそう。

その時、お母さんの心の奥まった部分が、少しだけ壊れてしまったのだろう。事件後、母の時間は父と知り合う以前の十代の頃に巻き戻ってしまった。私達家族は東京の家を出て母方の実家に身を寄せたのだが、母は父の遺品、ことに写真や動画はほぼ全てを処分し、一

切思い出を語ろうとしなかった。

そして、お兄ちゃんはおそらくこの頃から体を鍛え始めたのだろうと祖父母が言っていた。

きつと、お兄ちゃんは後悔しているのだろうか。

もう少し早く山を降りられたのなら、父親を助けられたかもしれない。

だからお兄ちゃんが体を鍛えているのは、今度こそ私達を守れるようになるためなのではないかと、銀行での事件の後、祖父母から聞いた。

きつと、そうなのだろう。

現に、お兄ちゃんは私達を銀行で、強盗の男から守ってくれた。

お兄ちゃんはただ不器用だっただけだ。

私達に興味がないわけじゃなかった。

お兄ちゃんは私達をとて大切にしてくれている。

そんなお兄ちゃんを、お母さんは怖がっている。

銀行での事件の後、お母さんはお兄ちゃんを避けるようになった。

私には、変わらずに愛情を注いでくれているけど、お兄ちゃんとは顔も合わせようとしなない。

なんで？ お兄ちゃんは、とつても優しいのに。

お兄ちゃんは、お母さんに避けられていても、お母さんを心配しているのに。

なんで？

この頃から、私の中の比重が、お母さんよりもお兄ちゃんに傾き始めた。

勿論、お母さんを嫌いになったわけではない。

でも、お兄ちゃんの方が。

「……お兄ちゃん」

今、お兄ちゃんはゲームの中で何をしているのだろうか？

戦っているのかな？ それとも、まだ最初の街の中を探索していたりするのだろうか？

いつ、お兄ちゃんは帰って来るのかな？

そうだ、お兄ちゃんが帰ってきたら、ゲームの中の話を色々とう。

そして、今は売り切れていないけど、またソードアート・オンラインが発売されたら、お兄ちゃんと一緒にやろう。

今まで物にほとんど興味を示さなかったお兄ちゃんが、興味を抱いたゲーム。

あまりお兄ちゃんとかかをするということが無かったから、今から楽しみだ。

「お兄ちゃん……私の、世界で一番大切な……ふふ」

私は、ずっとお兄ちゃんの寝顔を眺めていた。

私は今、幸せだ。

私にはお父さんはいない。

でも私には、祖父母が、お母さんがいる。

そして何より、私にはお兄ちゃんがいる。

私達を守ってくれるお兄ちゃんがいる限り、私の幸せはいつまでも続いていくだろう。

第7話 ホルンカ

俺は故郷の街を出て、北西に向かった。

上の階層への階段は、確か一番北にあったはずだから。

流石に昔過ぎて細かいところは忘れてしまっているが、北東は湖沼があつたはずなので、どちらかと言ったら北西の森の方が抜けやすいはずだ。

当然、モンスターは出てくるが、俺はそのモンスターを全て倒しなから進んで行った。

早く進むだけなら、放置した方がいいだろう。倒したところで何かを得られるわけでもないようだし。

だがモンスターは放置し続けてしまえば、いつの間にか、かなりの数になってしまう。

そして数が増え過ぎた場合、街を襲う。

勿論、1ヶ月や2ヶ月放置した程度では、増える数もそれほどではない。

だが、2年、3年と放置していると、マズイことになる。

現に前世では、登っている最中に滅んだ街や村をよく見てきた。

そうならない為に、定期的にその近辺の街の人間がモンスターを倒して数を減らしているが、すこしでもその手助けになればと、前世では、見かけたモンスターは基本的に出来るだけ倒してきた。

もしモンスターを放置したことが原因で街が滅んだ、などとなってしまうのは避けたかったからだ。

だから俺は、モンスターを倒しながら草原を進んで行った。

もう目の前には、森が見えている。

俺は、森に向かって歩き出した。

そう言えば、モンスターを倒した時に、視界の端に数字と文字が出る。

さつき、青イノシシを倒した時も、「フレンジー・ボアの前足」と言う文字が出てきていたんだが、一体これはなんなのだろうか？

周りを見渡してみても、特に何か変化があるわけでもない為、放置

で構わないとは思っているんだが。

これ以外にも何度か視界に文字が浮かんではいたが、意味がわからず取り敢えず放置していた。

視界の端といえば、この世界に転移してきた時から、なんだかよく分からない線やら何やらが視界の端にある。

顔を動かせば、それらの線も動くし、さわろうとしても触れなかったのだが、これらもよく分からない。

分からないことだらけだ。この世界は不思議で満ち溢れている。まあいいか。分からないってことは、分かる必要がないことなんだろう。

取り敢えず、鬱陶しいから今後は無視しよう。

その文字を読まなかったことで何か害があった訳でもないから、気にしないでおこう。

遠くに太陽が見える。綺麗な夕焼けだ。

俺は夕日を浴びながら、森の中に進んで行った。

森の中で出会うモンスターは草原のモンスターとは違っていた。

環境が違えば生きているものも違うのは当然のことだ。

だが、森の入り口近辺でも、もう草原のモンスターは一切見当たらなかった。

逆に森の近くの草原にも、森に出るモンスターは一匹も見つけられなかった。

他の地域のモンスターが別地域に紛れ込んだりすることはよく見かける光景なのだがな。

よほどどこら一带のモンスターの縄張り意識が強いのか、単に今回だけ見なかっただけなのかはわからないが。

とにかく、森に入ると敵も環境も雰囲気もガラリと変わった。

だが、やることは変わらない。見つけた敵は殴り倒す。

そうして何匹か倒していると、どこかから、いきなり軽やかな音が

聞こえてきた。

一瞬、俺に気付かれずに近付いたモンスターがいるのか!? と思っ
たが、違った。

そして、俺の体を金色の光が包んだ。

俺は咄嗟にその場から飛び退いたが、金色の光は俺の体から離れな
い。

しかし、数秒後、その光は消えた。

「なんだったんだ?」

体の調子を確認したが、特に害があるわけでは無さそうだった。

また訳のわからない現象が起こった。

ま、いいか。分からないものはいくら考えたって分からないんだか
ら。

俺はモンスターを倒しながら、森の奥に進んで行った。

しばらく進むと、森の中に村が見えてきた。

民家と商店合わせて十数棟くらいの、小さな村だ。

とりあえず、村に立ち寄ったのだからまずは村長に挨拶に行こう。

しかし、村長がどこにいるかは分からない。

取り敢えず、一番奥に村長がいる予感がする為、まずは一番奥の家
に入った。

「失礼する、貴方はこの村の村長か? 俺は旅人だ、ここには挨拶に
参った」

台所で鍋をかき回していた、いかにも《村のおかみさん》といった
感じの人が振り向き、俺を見て言った。

「こんばんは、旅のお方。お疲れでしょう、食事を差し上げたいのだけ
ど、今は何も無いの。出せるのは一杯のお水くらいのもの」

村長、ではないのかもしれない。だが、せっかくの好意だ、ありが
たく受け取らせてもらおう。

「ありがたい」

俺は喉が渴いていた。

当然お腹も空いているが、流石にそこまでこの方の好意に甘えるのはダメだろう。

俺は椅子に座って、汲んでもらった水を飲んだ。

「……ふう、美味しい」

渴いた喉を潤す水が、とても美味しく感じた。

それにしても、すこし疲れたな。

やはり久方ぶりの戦闘だからか。

それに、勘が鈍っている為、無駄な動きが多いのも疲れの原因だろう。

このまま勘を取り戻さずに先に進めば、俺は死ぬな。

間違いなく。

体から痛覚が消えて感覚も狂っているし、どこかでしばらく戦い続けて勘を取り戻さないと不味い。

確実にこのままでは第百層まで行かないだろう。

だが、この辺りの敵はダメだ。弱すぎる。

そして何よりも早く武器を手に入れなければ。

俺は素手の戦いが専門ではない。剣を二本持ったの戦いが専門だ。

勿論、初めから剣を二本持っていたわけではない。

初めは剣と盾を持って戦っていた。

だけど俺は思ったんだ、盾が邪魔だと。

盾があると剣も振りにくいし、大きくて重くて邪魔だし、何より、何かに隠れているのが性に合わなかった。

それでもしばらくは使い続けてはいたが、途中から俺は思った。

敵の攻撃をあんな大きな盾で受け止める意味なんてないと。

だからまず、盾を出来るだけ小さくしていった。

相手の攻撃は、避けて躲すか、小さな盾で逸らせばいいと考えたからだ。

そして盾を小さく、小さく、さらに小さくして行って、握りこぶしくらいの大きさまで盾を小さくした時、アイツらに言われたんだ。

お前のそれは盾である意味がないと。

むしろそれは盾ではないと。

その時俺は閃いたんだ。

なら、この盾の代わりに、もう一本剣を持てば最強じゃないかと。

それで俺は剣を二本持つて戦うようになった。

カズヤも俺に影響されたのか、途中から剣を2本持つようになったし、逆にクリフは盾で攻撃もできるようにと、盾を改造していった。

キズナはそんな俺たちを、馬鹿を見るような目で見ていたな。

懐かしい。

と、そんなことを考えていると、隣の部屋から、こんこん、と子供が咳き込む声が聞こえてきた。

おかみさんは、その声を聞いて悲しそうに肩を落としていた。

もしかして、子供が病気か何かなのだろうか？

おかみさんは、かなり困っている様子だった。

俺はおかみさんに聞こうとしたとき、おかみさんの上に金色の？

が浮かんできた。

ん？ 何だこれは？ まあいいか、取り敢えず、聞いてみよう。

「何か、困っているのか？」

おかみさんは、ゆっくりと振り返った。

ん？ 頭上の？ が点滅しているな。

「旅のお方、実は私の娘が……」

——娘が病気にかかってしまつて市販の薬草を煎じて与えてもいつこうに治らず治療するにはもう西の森に生息する捕食植物の胚珠から取れる薬を飲ませるしかないが、その植物がとても危険なうえに花を咲かせている個体がめったにいないので自分にはとても手に入れないから代わりに旅のお方が取ってきてくれればお礼に先祖伝来の長剣を差し上げましょう。

という話をおかみさんは身振り手振りを交えながら伝えてきた。

とにかく、娘さんの為に薬が必要で、その薬は西の森にいる植物を倒せばいいと。

そして、取ってきてくれたらお礼に剣をあげると。

「分かった、任せてくれ」

俺は剣がずっと欲しかったし、何より病気の娘さんをここまで心配している母親が目の前にいるんだ。

たとえお礼がなくとも、こういった人たちは出来るだけ助けたい。

それに、この方には水一杯の恩がある。

それを返さねば男が廃るといふものだ。

だから俺は、すぐに西の森に向かった。

一刻も早く病気の娘さんを助ける為に。

おかみさんが言っていた捕食植物自体はすぐに見つかった。

うねうねと無数にうごめく根っこ、葉っぱのついたツルが2本、ウツボカズラのような胴体、そして、上の方には人間の口に似ているものが付いている、とても気持ちの悪いモンスターだ。

つまり、口植物だな。懐かしい。

しかし、頭に花はつけていなかった。

この口植物は印象に残っていたから、まだ覚えている。

たまに頭の先に赤い花以外にも、赤い実が付いている奴がいるんだが、それを割ると臭い煙が出て、その匂いにつられてなのか、近辺にいる口植物が大わらわで寄ってくるんだ。

この気持ち悪い口植物が10体20体と寄ってくる光景はなかなか壮観で、その光景を見るたびにキズナが悲鳴を上げてバーサーカーと化していたな。

その光景が面白くて面白くて、ついつい俺とガズヤは実が付いているやつを探しては切って、探しては切ってを繰り返していた。

クリフは呆れていたが。

そして、辺りの口植物を倒し切ると、今度はキズナに俺とカズヤが襲われるんだ。

あの状態のキズナは迫力がありすぎて困る。

「シュウウウウ！」

そんなことを考えていたら、口植物は俺の存在に気付き、声を出しながら右のツルを突き込んだ。

俺はそのツルを左にギリギリで避け、通り過ぎて行ったツルを掴み、全体重を乗せて引っ張った。

口植物はこちらに向かって攻撃してきていた、つまり重心がが前に傾いていたことも手伝って、バランスを崩しながらこちらに突っ込んできた。

俺はツタを手放し、足の部分にあたる根っこを足払いの要領で蹴り払った。

それによって、口植物はバランスを崩し、地面に倒れこんだ。
これで、つ、と、近くにもう一匹モンスターがいるな。

早めに片付けよう。

俺は、立ち上がろうと、もがく口植物を妨害しながら攻撃を加えていき、口植物は青い光となって砕け散った。

「さて、次だ」

俺は次の口植物に向かって歩き出した。

口植物は俺の存在に気づいたようで、こちらに向かって来ようとした。

だが、次の瞬間、いきなり口植物は反転して奥に進んで行ってしまった。

「逃げた？ いや、これは違う、か？」

一見俺から逃げ出したように見えたが、あれはもしかしたら。

「追いかけるか」

俺は口植物を追いかけた。

第8話 多対1

口植物は見た目よりも足が速い。

だから追いかけているときに少し距離を離されたが、見失いはしなかった。

そして、遠くに沢山の口植物が集まっているのが見えた。

「やはりか」

恐らく、誰かが口植物の実を割ったのだろう。

あの実を割ると、変な匂いが広がり、それに群がるように沢山の口植物がわらわらと寄ってくるからな。

数は目測で約30以上、それなりの数だ。

口植物が群がっているのが2ヶ所なため、襲われているのは恐らく2人。

場所が少し離れているから、仲間ではないのか？ いや、この口植物に引き離された可能性の方が高いか。

俺はその場所に急ぎ向かいながら、出来るだけ状況を確認するように努めた。

遠くに見える口植物達の隙間からは、囲まれているながらも懸命に戦っている2人の姿が見えた。

1人は、故郷の街で見た、逆立った赤髪の親切な男と一緒に広場を抜け出していた黒髪の少年で、もう1人は、まだ見たことがない、真面目そうな少年だ。

不思議なことに、黒髪の少年も、真面目そうな少年も、体の節々が赤く光っている。

そして、2人とも服はボロボロで、所々に穴が空いている。

おそらく、口植物が口から出す腐蝕液を食らったのだろう。

その割には、動きに痛みを我慢する様子が見られない。

あれだけ服や防具がボロボロなのだから、怪我をしてもおかしくは無いはずなのだが。

もしかしたら、あの2人も痛みを感じられなくなっているのだろうか？

2人の顔がチラリと見えたが、どちらも必死な表情で、前世の俺たちのように笑いながら相手をできるだけの余裕はなさそうだ。

つまり、助けに入った方がいいだろう。

だが、2人の間には少し距離があるため、すぐに援護出来るのは片方だけだ。

それにしても、2人の体の赤い光はなんなのだろうか？

ボロボロの服、装備、それに合わさって見える赤色が、俺には血のように見える。いや、もしかしたら、血なのか？

だが、血が流れている様子は見られない。

ただ赤く光っているだけだ。

もしかして、あの2人は人間じゃない？

いや、今はそんなことどうだっていいことか。

とにかくあの赤い光が血のようなものだとしたら、黒髪の少年より、真面目そうな少年の方が危なそうだ。

真面目そうな少年は、まだ元気に動き回ってはいるが、体というのは急に限界を迎えて、いきなり動かなくなるものだ。

2人も痛覚を感じられなくなっているのなら、いきなり力尽きてもおかしくはないだろう。

だからまずは真面目そうな少年の援護に入ろう。

だが、黒髪の少年からも出来るだけ口植物を引き付けた方がいいか。

なら、あれだな。

俺は息を大きく吸い込み、全力の殺気を込めて咆哮をあげた。

「うおおおおおおおおあああ!!!」

その声に反応して、真面目そうな少年を囲っていた、殆どの口植物の動きが止まり、こちらに振り返った。

黒髪の少年の方は見ていないが、何匹かは釣れただろう。

モンスターは知能が低く、本能で動いているものが多い。

だから、殆どのモンスターは自分にとって脅威となる存在に目がいく。

だから基本的には、目の前の攻撃をしてきた人に襲いかかるが、よ

うはそれ以上の脅威だとモンスターに思わせれば、モンスターはこちらに標的を変える。

そして、殺気とは、相手の本能に恐怖を、危機感を抱かせるものだ。だから、俺が全力で殺気を浴びせたこの口植物たちは、俺に狙いを変えた。

ただ、咆哮は当たり前だが声だ。

声に乗せて殺気を伝えているため、距離が近ければ近いだけ殺気が直に伝わるが、距離がひらけば開くほど、殺気も相手に伝わらなくなる。

だから、黒髪の少年の方からは、あまり引きつけられないだろう。

それでも、俺はこの真面目そうな少年の周りにいる口植物を全て引きつけるつもりで咆哮を上げた。

だが。一部の口植物は、今だに少年を狙っている。

思ったよりも効果が薄い。

たとえば目の前の人間と戦っていたモンスターであろうと、この俺の殺気を込めた全力の咆哮を近くで聞いて、無視をするモンスターがいるとは思わなかった。

やはり鈍っているな。

戦いから遠ざかって十数年、俺の殺気も温くなったということか。

っ、不味い！

さっきの咆哮で、真面目そうな少年まで動きを止めてしまっている。

まだ少年を狙っている口植物がいるというのに、だ。

俺は、口植物達と距離を詰めていき、そして、口植物の横に生えていた木を蹴り、三角飛びの要領で高く飛び上がった。

そのまま俺は口植物を足場として、口植物達の上を通り過ぎていき、今まさに背後から真面目そうな少年を攻撃しようとしていた口植物に向かって飛び蹴りをかました。

「っ、な!？」

間に合った。だが、少年は死地にいるというのに、思考の切り替えが出来ていない。

「戦場でボサツとするな！ 死にたいのか！」

「っ！」

「生きたいのなら武器を振るえ！ その剣は飾りでは無いのだろう！」

俺は、今だに状況を理解しきれずに動きが固まっていた少年に喝を入れた。

そして、俺はすぐさま少年と距離をとった。

あのまま少年の近くで戦っていれば、少年が攻撃に巻き込まれてしまう恐れがあるためだ。

ここまで手助けをしたんだ、後の数体は自力でなんとかしてほしい。

さて、久々にここまでの数の敵がいる状況だ。

昔ならばいざ知らず、数十年の歳月で勘が鈍った今の俺には、余裕があるかはわからない。

「……」

口植物達は、まっすぐ俺に向かってきている。

もともと本能に忠実なモンスターだ、取り囲むように動いたり、仲間と協力をするような奴らじゃない。

ある程度の仲間意識はあるだろうが、戦略的な戦い方はしないだろう。

つまりこの状況は、戦闘勘を取り戻すのに最適な状況というわけだ。

今後、間違いなく多対1の戦闘が増えていく。

だからこの程度、軽く突破しなければならぬ。

多対1の戦闘で重要なのは、位置取りだ。

特に今回は武器も防具も盾も何も無い状態での戦闘、つまり、敵の攻撃を防ぐということはできない。

そのため、攻撃は避けるしかない。

しかし、人間には背後に目は付いていない。だからどうしても背後からの攻撃は避けられないし、当然、全方位を囲まれてしまい、一斉に攻撃されてしまえば、逃げ場はない。

だから生き残るためには、常に冷静さを保ちながら、敵を背後に回らせないように動き回り、敵同士が動きを邪魔し合うように誘導して、時には敵を盾に、時には敵に隠れながら、敵の攻撃を見極め、常に1方向または2方向からの攻撃しか来ない位置取りで戦うのが賢い戦い方だ。

だが、俺はある程度少年と離れたら、まっすぐ口植物に突っ込んでいった。

「…………ふ」

賢い戦い方？ 生き残るためには？ 重要なのは位置取り？ 敵を誘導？ 攻撃を見極め？ 冷静さを保つ？

「知らん、知らんなあ!!」

俺に、そんな賢い戦い方ができるとでも思っているのか！

そんな賢い戦い方で、この俺が生きられるとでも思っているのか！

背後からの攻撃は避けられない？

全方位を囲まれば、逃げ場はない？

そんなことを誰が決めた!?! 常識か!?

知らん、知らん知らん! 知らん!

全方位を囲まれば生き残れない程度の実力なら、第百層到達など成し得られるわけがなからうが!

逃げ場がないなら作ればいい! 避けられないならとつとと死ね!

「さあ貴様ら! 上でも下でも全方位からでも、何処からでもかかってこい!!」

俺は、少しだけ上がった気分以身を任せ、口植物の群れの中へと殴り込みをかけた。

朝田士郎の周囲には、口植物、正式名称「リトルペネント」がひしめいていた。

「リトルペネント」達は、背後から、横から、上から、ツタを、腐蝕液を使って絶え間なく朝田士郎に攻撃を仕掛けている。

だが、朝田士郎はそのことごとくを紙一重で避け続けていた。

そして、近くの「リトルペネント」を手当たり次第殴り、蹴り、足場にして、「リトルペネント」達に囲まれた、この狭い空間を縦横無尽に駆け巡っている。

何故、朝田士郎はまだ一度たりとも攻撃を食らっていないのか？

それは朝田士郎が、本能で生物の気配と殺気を感じ取っているからだ。

生物には必ず気配というものが存在する。

それは例え植物でも、虫でも、そして、ゲームの中の存在であろうとも、必ずだ。

朝田士郎はその生物の気配を感じることで、敵の位置を本能的に把握しているというわけだ。

そして、どんな攻撃にも、たとえ意識していなくとも、殺気は乗っている。

殺気、つまり他者を攻撃する意思が、「リトルペネント」のツタや腐蝕液に乗っているため、朝田士郎はその殺気を感じとることで、攻撃の軌道や速度、攻撃を行う瞬間を本能で理解しているのだ。

「リトルペネント」はモンスターだ。

気配を抑えたり、ましてや殺気を込めずに攻撃するなどということはない。

本能の赴くままに、朝田士郎を攻撃し続けている。

つまり朝田士郎にとって、この「リトルペネント」は相手にしやさない敵というわけだ。

目の前で敵が砕け散った。

そして俺は背後から勢いよく迫っていたツタを見ることもなく避け、そのまま掴んで、ツタが前方に伸びる勢いを利用し前方に飛び、途中でツタを離して目の前の敵に跳びついた。

その跳び付いた敵をひたすら連続で殴り、殺気を感じた瞬間、敵を蹴り後方に跳んだ。

そして、地に足がついた瞬間、そのままの勢いで体を丸めて後転をし、腐蝕液とツタを避けながら背後にいた敵を蹴り上げた。

久しぶりだからか、敵の気配が捉えづらい。

だが、それでも口植物から攻撃をもらう気は全く無い。

「ふ、ふは」

思わず口から笑い声が溢れてきた。

そうだ、そうだ！ これだ！ 久しく忘れていたこの高揚感！ 臨

場感！ 爽快感！

これこそ、これこそが戦場だ！

一つでも間違えた瞬間命が潰えるこの感覚が、一瞬一瞬で、どんどん研ぎ澄まされ、磨き上げられていく本能が、敵の殺意を一身に受け続けるこの心地よさが、ひどく懐かしく、気分を高揚させていく。

ああ！ 今！ 俺は生きている！！

だが、まだまだ、まだ足りない。

強さが足りない、危険が足りない、痛みが足りない！ 絶望が足り

ない！ 敵が足りない！

足りない、足りない足りない足りない！

この程度か？ まだだ、まだだろう？ この程度のはずがないよな！ そうだろう！

だが、この場にいる敵に、これ以上の強さを持つものもおらず、これ以上数が増えることもなかった。

いつの間にか、俺の目の前には敵がいなかった。

戦闘は、終わってしまった。

「……ふう、久しぶりの本格的な戦闘で、ほんの少し熱くなっていたか」

まあ、この程度の相手ではそれほど熱くはなれなかったが。
もつと齒ごたえのある相手で、武器があつたならよかつたのだが。
ま、いいか。

そういえば、途中から完全に忘れていたが、あの少年達は無事だろ
うか？

俺は周囲を確認した。

第9話 コペル

真面目そうな少年は、ボロボロではあるが生きている。もう1人の黒髪の少年も、どうやら生き残ったようだ。

黒髪の少年は、こちらに近づいてきた。

そして、薄暗い森の中、初めてお互いが近くで顔を合わせた。

「っ！」

カズヤ!?

俺は、黒髪の少年を近くで見たとときに、一瞬、前世での仲間の名前が脳裏をよぎった。

だが、違う、だが、似ている。

いや、カズヤがここにいるはずはないか。

それに、カズヤはもつと強い。

少なくともこの口植物に苦戦していたのは子供の頃だけだ。

いや、目の前の少年も、まだ子供ではあるか。

そう考えると、あの状況を切り抜けたのだから、この少年はなかなかの実力を既に持っているのか。

まあいい、とりあえずは置いておこう。

「どうやら、2人とも無事なようだな、良かった」

「……」

……ん？ どうやら2人の間に微妙な空気が流れている。

仲間、だと思っていたのだが、違ったか？

ああ、そうか、この惨状は片方が実を割ってしまったから起こったことのはずだ。

つまり、片方はもう1人のせいで死にかけ、片方は味方を巻き込んで死にかけてしまった罪悪感を感じていて、そのせいで微妙な雰囲気の流れているのだろう。

「そうか、モンスターの赤い実を割ってしまったんだよな？ 気にするな、実を割ってしまえば、その匂いにつられて周囲のモンスターが寄ってくるなど、知らなかったのだろうか？」

「……」

ん？ さらに微妙な雰囲気にもしかして。

「知ってたのか？」

「……うん」

真面目そうな少年が、そう答えた。

「だが、事故なのだろう？」

「……いや」

真面目そうな少年が、そう答えた。

この感じだと、この真面目そうな少年が、実を割ったようだな。

しかも、分かっている、故意に。

まあ、俺達も昔はよくやってきたことではあるが、力量差をわきま
えなければ、単なる自殺行為だ。

「……ごめん、キリト」

そう言っつて、真面目そうな少年は膝をたたんで地に座り、頭を地面
につけて、その横に手を置いた。

「僕はまだ、ソードアート・オンラインをゲームだと思っていた」

「ソードアートオンラインはゲームじゃないぞ？」

あの亡霊がそう言っていたしな。

つと、今は2人が話しているんだから、余計なことは口出ししない
ほうがいいか。

「そう、だよ、でもさっきまでの僕にはそれが理解できていなかった、
所詮ゲームだと、相手を騙し、出し抜き、奪っても……殺しても、
いいと思っていた、僕はまだ他のMMORPGと、このSAOを同一
視していたんだ、でも、彼の声を聞いて、死を明確に感じて、やつと
理解できたんだ」

彼とは、俺のことか？ 俺の声？

「これはもう、遊びじゃないんだって、命を懸けているんだって、だか
ら、その時、やつと自分が何をしてしまったのか、理解できた、僕は、
キリトを、人を……」

真面目そうな少年は、心底後悔しているような声色で話している。
「結果論なんて関係ない、生きていたから、なんて言うつもりはない、

謝っても許されないうちを助けたのは分かってる、許してもらえないなんて思っていない、だけど……ごめん」

「コペル……」

黒髪の、キリトと呼ばれていた少年の顔には、憎しみや怒りの色が浮かんでいない。

どうすればいいのか迷っている表情だ。

今の言葉の中には何個か理解できない場所があったが、ある程度の事情は分かった。

要するに、コペルと呼ばれた少年が、なんの恨みがあるのかは知らないが、実を割ってモンスターにキリト少年を襲わせて殺そうとしたのだろう。

その割には、コペル少年の方が危ない状況ではあったが。

何かしらの危機脱出手段を持っていたのだろうか？

いや、あの状況で使っていなかったとなれば、うまく危機脱出手段が機能しなかったと言ったところか？

それで、危うくなったところに俺が助けに入ったと言ったところか？

2人がどのような関係で、どんな事情があったかは分からないが、これは当人同士で解決すべき問題で、俺が口を出すべきではないだろうな。

ここで横から出しゃばって、問題をなあなあで済ませてしまうより、当人同士でしっかり話し合ってもらった方がいいだろう。

幸い、キリト少年には怒りや憎しみの感情が顔に出ていない。

ならば、悪い結果にはなるまい。

だが、2人ともボロボロだ、傷ついたままいつまでもここにいないのはよくないだろう。

「済まんが、ここでは余計な邪魔が入る恐れがある、だから、村に帰ってから、そこで2人ゆっくり話し合った方がいい」

「そう、だな」

「……だけど、僕は」

キリト少年は頷いたが、コペル少年はまだ難色を示している。

「済まんが俺も急ぎの用があるのでな、いつまでも時間を潰すわけにはいかんのだ、だからと言ってここで別れて、村までの帰り道で2人が死んだとなれば目覚めが悪い、村までは同行するつもりだ、そこで2人ともゆっくり話し合い、傷を癒せ」

俺も早くあの村の子供の病を癒す薬の材料を取って来なければならんのでな。

「……分かった」

「よし、ならば、行こうか」

村に戻るまでの道に、モンスターは出なかった。

俺は2人を村まで送り、そのまま、また森に入ろうとした。

「待ってくださいー!」

その寸前で、俺はコペル少年に呼び止められた。

「どうした?」

「あの、先ほどは助けていただき、ありがとうございます」

そう言ってコペル少年は俺に頭を下げた。

「気にするな、それに、そんな堅苦しくなくていい」

「いえ、でも……うん、ありがとう」

「どういたしまして」

感謝を伝えることは難しくもあるが、大切なことだ。

それが出来るのだから、この少年の心根は、きつと悪くないはずだ。だから、キリト少年を殺そうとしたのは、きつと魔がさしたただけだろう。

なら、話し合いで解決できるはずだ。

俺達のように、武器を持って殺しあう、などとはならないだろう。

「あの、お礼になるか分からないけど、これ」

そう言って、コペル少年は光る球体を差し出してきた。

「これは?」

「《リトルペネントの胚珠》です」

リトルペネント？ 胚珠、もしかしてこれは、薬の材料か？

「いいのか？」

「うん、本当にありがとう」

「こちらこそ、感謝する」

これで、あの子供が元気になってくれるといいのだが。

「僕は《コペル》です」

コペル、外国人か？ 顔立ちを見る限り日本人だと思っていたが。

いや、ハーフ？

もしくはこの世界の現地民かも知れないか。

「俺は朝田士郎だ、ではな、またどこかで会おう」

俺は、胚珠を持って、急ぎ村の奥に向かった。

「え？ ……あの、それってリアルネームじゃ」

「あの男、アバターが変化していなかった、それに、異常なほどに戦い慣れている、間違はなくニュービーじゃない、だが、もしβテストにいたなら、あの実力だ、話題になっていてもおかしくはないはず……まさか、いや、流石に早計か？ だが、あの男、俺を見て驚いていた、直ぐに平静を装っていたが、と言うことは……そう考えると……だが……それに……」

俺は村の一番奥の家に入った。

そして、かまどで何かを煮ているおかみさんに近づき、胚珠を渡した。

「これを」

すると、おかみさんは一気に20歳ほど若返って見えるほどに顔を輝かせ、胚珠を受け取り、俺に感謝をしてきた。

そして、胚珠をそつと鍋に入れたおかみさん改め若奥さんは、部屋

の箱から赤い鞘の長剣を取り出し、再度の礼とともに剣を俺に差し出した。

「ありがとう」

俺は剣を受け取った。

剣だ。俺の目の前には、今、剣がある。

また俺の体を金色の光が包んだが、そんなことが気にならないくらいに俺は気分が高揚していた。

今直ぐに強敵と戦いたい、血がたぎるようだ。

だが、俺はそれを抑え込み、鞘を腰に引っ掛けて、椅子に座った。

もし、これで、あの薬になんの効果もなく、娘さんの体調が良くならなかった場合、俺はただ剣をもらったただけになってしまう。

せめて、少しでもよくなったかどうかを確認するべきだ。

そして、もし少しも良くなっていなかったのなら、また薬の材料を取ってこよう。

それが、責任というものだろう。

そう思い、しばらく俺はその家から離れなかった。

そして、若奥さんは鍋の中身を木製のコップに注ぎ、大切そうに奥の部屋に向かって歩き出した。

その後、先程まで時折隣の部屋から聞こえていた、こんこん、という娘さんの咳の音が聞こえなくなった。

そして、しばらく時間が経ち、若奥さんは奥の部屋から戻ってきた。その顔と、明るい雰囲気を見るだけで、聞かなくてもどうなったかはわかった。

きつと、娘さんは良くなったのだろう。

なら、俺がここにいる意味はもうないな。

「世話になった、この剣は大切に使用してもらおう」
そう言つて、俺は家を立ち去った。

第10話 キリト

俺は早速、剣の使い心地を確かめるために村を出た。

「良し」

剣を持つのは前世以来だから、十数年ぶりか。

俺は、腰に下げた鞘から、剣を引き抜いた。

「……ん？」

おかしい、剣が思ったよりも少し重い。

軽々しく扱える程度の重さしかないと思っていたのだが。

見た目よりも重たいのか？

いや、材質を見る限り、特別な物は使われていなさそうではあるし、剣の芯や柄、握りの部分に重さを追加するような細工が施してある様子もない。

もし細工してあった場合、剣の重心がずれるため、握れば簡単に分かる。

だからそれはあり得ない。

この剣の重心は、見た目通りの位置にある。

なら、なんだ？

俺は考えた。

そして、ある可能性に思い至った。

「……もしかして、俺の筋力が衰えている？ いや、この世界の物が全体的に重たいのか？」

俺は天井を見ながら考えた。

「……ダメだ分からん」

まあいいか。

原因など考えたところで分からん。

事実が事実として受け止めよう。

とにかく、この剣の重さに対して、俺の筋力が足りていない事は間違いない。

だから、体をもつと鍛えなければな。

別に、重い剣が扱えないわけではない。

重たい剣も、軽い剣も使った事はあるし、十分に戦えはする。だが、人それぞれに最も扱いやすい重さというものがある。

カズヤはどちらかといえば重めの剣を好んでいたが、俺はカズヤと比べると軽めの剣を好んでいた。

軽い剣、重い剣ともにそれぞれ利点、欠点があるため、状況や敵によつて最適な武器の重さは変わってくるものではあるが、好みは別だ。

剣は、重ければ重いほど、上手く扱えるのであれば威力は上がっていく。そして丈夫だ。

だが、その分軽い剣よりも斬撃の速度、移動速度、取り回し易さ、正確性が下がるのと、体力の消耗が激しくなる。

そして、扱う人間にとつて剣が重すぎる場合、逆に威力が下がってしまう。

力とは、速さと重さだ。

いくら重かろうとも、速度が出なければ威力は無いに等しくなる。体全体を使つて振り回せているのなら大丈夫だが、重い剣に振り回されているようなら、当然威力も精度も速度も何もかもが下がる。

そして、軽い剣は、斬撃の速度や取り回し、扱いやすさ、正確性、疲労度、移動速度などが、重い剣よりも優れている。

しかし、軽めの剣は耐久度に難があり、そして何より、レイピアなどの突きを主体とする武器では無い限り、どうしても威力が足りない。

人間の骨程度の硬さなら、たとえばガラスのように軽い剣であろうとも断ち切れる自信はあるが、モンスターは人間の骨などとは比べ物にならないほどに硬い敵が多い。

そんな敵に対して斬撃を繰り返し、威力が足りずに体内で剣が止まってしまった、となれば致命的だ。

前世では何度もあった。

剣が一本だけ敵の体内に嵌っただけなら、まだもう一本あるから大丈夫なのだが、2本持つていかれたときは本当に辛かった。

敵が素直に返してくれるわけもなく、隙を見て剣を引き抜こうに

も、一度敵の体内で止まってしまった武器は本当に硬くて、引っ張ってもビクともしないため、そうなってしまえば、拳で戦うしか無くなってしまう。

ただでさえ硬い敵なのに、武器を手放さざるおえなくなると、途端に有効打が消えてしまう。

だから、地道に拳で敵の体内に衝撃を伝えて、ゆっくりと敵の体を破壊するしかなくなってしまおう。

つと、思考が逸れていたな。

とりあえず、しばらくはこの重さで戦うか。

そして体を鍛えて、少しでもこの剣が軽く感じられるようにしていこう。

しばらく素振りをして、感覚を掴んだ俺は、早速モンスターと戦うために移動を開始した。

そして、遠くに、猿型のモンスターを2体見つけた。

2体のモンスターは、それなりに近い距離ではあるが、どちらも向こう側を向いている。

ならば背後から近寄り片方の首を即座に切り飛ばそう。

俺は気配を殺し、足音を立てないように猿に向かって走った。

ただ、森の中では木の枝や枯葉など、踏むと音を立てるものがよく落ちているため、小さな音は出てしまおうが。

それでも、俺はあと一歩で剣が届く場所までバレずに近づけた。

その瞬間、慌てて猿が振り返るが。

「遅いー！」

俺は剣を水平に振り、その刃は寸分たがわず猿の首に直撃し、首を切り飛ばした。

……はずだった。

しかし、目の前の猿の首は、まだ繋がっている。

「何!?!」

その瞬間、猿は地面にギリギリ届かないくらいの長い2本の手を縦

に振り回しはじめた。

俺は驚きで一瞬止まった思考をすぐさま立て直し、即座に半歩下が
り、地を踏みしめて、伸びてきた手を切り飛ばした。

今度は切れなかったなどとはならず、猿の手は俺の後方に飛んで
いった。

そして、猿の体は青い光となり爆散した。

そして、すぐにもう一体の猿が、今度は体をコマのように回転させ
ながら突撃してきた。

俺は横に大きく動き、その突撃を見送った。

その攻撃は悪手だ。

あれだけ回転しているのなら、周囲がうまく見えないだろうし、音
での判断も難しい。

戦いの最中に敵から目をそらすなど、殺してくださいといっている
ようなものだ。

俺は気配を殺しながら、背後から猿に近づき、回転が止まった瞬間
に、猿の首を切りつけた。

だが、やはり猿の首は繋がったままだ。

よく見ると、俺の斬撃の後には、赤い光が走っている。

これは、あの口植物に囲まれていた2人の少年の体にあった赤い光
と同じものか？

とりあえず、俺は猿が振り返る前にもう一度切りつけた。

その切りつけた場所には、赤い光が浮かんでいる。

そして、猿の体は前の一体と同様に爆散した。

やはり、あの赤い光は傷、もしくは血なのだろう。

それにしても、まさか首を切られて生きている生物がいるとは思わ
なかった。

久しぶりに剣を使う戦闘で、少し舞い上がっていて、残心を忘れて
いたな。

例えば敵が青く爆散したとしても、倒したと思っただけでも、すぐに油
断するのは不味い。

俺の知覚外から奇襲をされるかもしれないし、青く爆散しても何ら

かの手段で攻撃を行ってくる敵がいるかもしれない。

敵を倒した瞬間や、勝ったと思つた瞬間が、一番気が緩んでしまうものだ。故に残心は決して忘れてはいけぬ。

なのに、そんな当たり前を忘れてしまつていゝとは、こんな体たらくでは、すぐに死にかねない。

気をつけよう。

そうしてしばらく進んでいると、周囲に敵が見当たらない場所についた。

警戒心を解く気はないが、ここで少し休むとしよう。

「……………」

疲れた。

当然か、今日は色々あつたし、もう夜だ。

ついつい剣を手に入れたことによる感動で、すぐに村を飛び出してしまつたが、あの村でどこかの家に泊めてもらい、朝になるのを待つべきだつたのだろう。

俺は天井を見ながら、木に背をつけ、少し体を休めた。

この世界は今、夜だ。

元の世界も今は夜なのだろうか？

「元の世界、か」

詩乃は、大丈夫だろうか？

まあ、大丈夫だろう。

詩乃はしっかりとる者だから、俺がいなくとも何の問題もないだろう。

むしろ俺がない方がいい方であるかもしれない。

食事の用意が少なく済んだり、洗濯物が少なくなるしな。

それに、幼い頃はとも嫌われていたし、今はそれなりに仲良くはなつたとは思ふが、それなりだ。

勿論、ある程度心配をかけてはいると思うから、無事を伝えたくは

ある。

だが、少なくとも十数年はこのアインクラッドにいることになるだろうからな。どうしようもないか。

まあ、それだけ時間が経てば俺のことを忘れるだろう。

元の世界に戻った時に、詩乃に「どちら様ですか？」と言われたら、流石に悲しいと思う。

だが、いつまでも心配をかけ続けるよりも、忘れてもらっていた方がいいか。

そう言えば、俺は考え事をする時、上を向く癖があると、詩乃に言われたことがある。

確かにそうだ。

現に今、俺は天井を見上げている。

まあ、だからなんだ、と言うわけではないが。

「ん？」

誰かが近づいてきている、敵か？

俺は天井から目を離し、少し警戒しながらそちらを見た。するとそこには、黒髪の少年がいた。

「……見つけた」

「お前は……キリト少年か」

一瞬目の前の少年の名前をど忘れして、考えてしまった。

しかし、すぐに思い至ったから大丈夫だろう。

だが、キリト少年は、目つきが鋭くなった。

忘れていたのがバレたのか？ いや、そう言えばこれはコペル少年が言っていただけで、まだ自己紹介はしていなかったか。

もしかしたら、キリトとは親しいものが呼ぶあだ名のようなもので、俺が呼ぶのは失礼だったかもしれない。

「……そう言うことか」

ん？ キリト少年の口に、一瞬笑みが浮かんだような？

何なのだろうか？

「なあ、あんたに少し聞きたいことがあるんだ」

「なんだ？」

そう言えばさつき、見つけた、と言っていたか。

と言うことは、キリト少年は何かを聞くために俺を探していた、と言うことか。

「あんた、βテスターか？」

ベータテスター？ ん？ なんだそれは？

いや、どこかで聞き覚えがあるような無いような？

ああ、昔クラスメイト達の会話の中に、ベータテスターの応募がどうのと言うのが、あったような、なかったような？

いや、それは一億円の話だったか？

まあ、少なくとも何かに応募した記憶はないから違うんじゃないか？

「いや、違う」

「そうだよな」

と思う。

そう続ける前にキリト少年の言葉に遮られた。

「俺はβテスターだった、だが、少なくともあんたのような戦い方をする奴は見たこともなければ聞いたこともない、あんたのように、強くて特殊な戦い方をする奴は、十分話題になっただけでもおかしくはないはずだからな」

よく話が理解できなかった。

褒められているのだろうか？

「なら、あんたはニュービーか？」

ニュービー？ なんだそれは？ 少なくとも俺はそんな言葉を聞

いたことはなかった。

「違うよな？ あんたは戦いに慣れすぎている、動きが完全に熟練者のそれだ、それに何より、「リトルペネント」の実を割ったら周囲のモンスターが群がってくるなんて情報、ニュービーが知っているはずがないもんな」

あー、そんな早口でまくしたてられても、ちょっと待ってくれ。

えっと、やっぱり俺はキリト少年に褒められているのだろうか？
動きがいいと。

リトルペネントっていうのはあれか、口植物のことか。
あいつらの実を割ったら口植物が群がってくるなんて、前世では常識なんだが。

何だろうな？ やっぱリトル少年は俺を褒めるために追いかけてきたのだろうか？

しかし、その考えは、次のキリト少年の言葉で吹き飛んだ。

「つまり、あんたは、俺たちよりもずっと前からアインクラッドを知っていたんだろう？」

「な!?! 何故、それを!?!」

何故キリト少年は、俺の前世のことを!?!

俺は驚きのあまり、立ち上がった。

その瞬間、キリト少年の雰囲気は、さらに鋭くなった。

第11話 キリリト

「あんたは、このSAO開発者の一員、だな？」

「……？」

キリト少年の口から出た言葉は、俺が予想していた言葉と違った。「あんたはこのSAOの開発者の一員であるから、内部のモンスター情報を持っていて、システム外スキルも知っていた、そしてなにやり、βテスト以前からモーシヨンのテストやデバツクなどをやっていったから、あれだけの動きができた、そうだろうか？」

……え？ キリト少年は何語を話しているんだ？

そうだろうか？ と言われてもな。

「いや」

すまん、何を言っているのかわからない。

そう続けようとしたが、途中でキリト少年に遮られた。

「隠さなくたって良い、俺はあんたに危害を加えるつもりはない、あんたも、巻き込まれたんだよな？ 俺の予想では、あんたは開発者の一員ではあったが、プライベートでもこのSAOをやろうとしたんだ、デスゲームになることを知らずに、あれだけの動きが出来るんだ、かなり練習をしたんだろう？ それだけやり込んでいたのなら、プライベートでもSAOをやろうとしても不思議じゃない」

「……」

この感じは、あれだ、あの故郷の街での亡霊の話を思い出す。

こつちが全く理解できていないのに、どんどん話を進めていく、あの亡霊のようだ。

「確かに開発者の一員だと知られば、こんな状況だ、どんな目に合うか分からない、だけど、あんたが持っている開発者側の情報は、このSAOの攻略に役立つはずだ、だから協力してほしい、このデスゲームから抜け出すために！ 勿論、あんたのことは絶対に誰にも言わない、約束する」

……何か、キリト少年は俺のことを勘違いしていないか？

そんな気がする。

「すまんが、キリト少年が何を言っているのか、分からないな」

「あんたが持っている開発者側の情報があれば、助かる命は数え切れないくらい増えるはずなんだ！ それに、このゲームに囚われる時間だって、短くなるかもしれない！ だからどんな些細な情報でもいい！ 頼む！」

そう言って、キリト少年は俺に頭を下げた。

「だから、キリト少年が何を言っているのか分からないと言っているんだが」

もうちよつと分かりやすく、ゆつくり教えて欲しい。

キリト少年が俺になにを頼んでいるのか、しつかり理解できなかつた。

「……そう、だよな、分かってた、そんなうまい話があるはず無いよな、開発者側の人間が、プレイヤーにいるなんて、な……すう……ふう……」

キッ！

キリト少年の目が、キリリと輝いた。

そして、少年は剣を抜いて、ゆつくりと構えた。

「なんの真似だ？」

俺と戦いたいのだろうか？

「分かってたさ、本当は、最初からあんたが茅場側の人間だってことはな」

「なに？」

茅場とは、あの亡霊のことか？

俺が、亡霊側の人間？

確かに、一度死んだことがあるから、俺も亡霊側だといえれば、そうなのかもしれない。

「まず、俺はあの茅場のチュートリアルの前に、あんたを見たことがあるんだよ、《はじまりの街》周辺の草原でな」

「それがどうしたんだ？」

「とぼけても無駄だぜ、その時のあんたは、今のアバターと何にも変わりが無い、おかしいよな？」 俺たちプレイヤーは手鏡の効果でチュウ

トリアル後は全員リアルの姿になっているはずなのに」

頼む、もつと分かりやすく教えてくれ。

「だが、あんたのアバターは一切の変化が見られない、最初は自分のリアル顔に出来るだけ似せてアバターを作ったのかとも考えた、けどな」

キリト少年は、少し溜めて、

「あんたの顔、作り物に見えるぜー」

キリリつとした顔でそう言った。

キリト少年が、キリリつと。

「……ふっ」

やばい、面白い。

「つまり、あんたのアバターはリアル顔ではない、作り物の顔だ、プレイヤーは全員リアル顔になっているはずだから、あんたはプレイヤーじゃない事になる、勿論、証拠はそれだけじゃないぜ」

そう言えばさつきも、キリト少年の目が、キリリと輝いていたな。

「ふっ……」

やばい、キリリとしたキリト少年、っ、くくっ。

「あんたと《ホルンカ》の西の森で顔を合わせた時、互いに驚いていたよな？ 俺はあんたのアバターに見覚えがあったから驚いていたが、あんたが驚いた理由はなんだ？ 最初は分からなかった、もしかしたら、リアル顔の俺を知っているやつなのかもと思った、だが、違うよな、このゲームの中で、あんたも俺に見覚えがあったんだよな？」

っやばい、最後以外殆どなにも聞いていなかった。

なんだったか、確か、森の話をしていたよな。

それで、キリト少年に見覚えがあったか、だったよな？

そうだな、故郷の街で亡霊が出てきた後、広場を冷静に離れていくキリト少年を見ていたから見覚えはあった。

「……ああ」

「茅場のチュートリアル前、あんたは草原で俺を見たんだ、そして、俺に姿を見られていたことも知っていたんだろう？ だから、あの森で顔を合わせた時、驚いていたんだよな？ 草原で顔を見られた相手

に、こんなに早く再開するとは、アバターが変化していない事に気づかれてしまう、つてな」

ん？ 草原？ いや、草原ではキリト少年は見えていないが。
「待て」

「分かってるさ、それだと説明がつかない所があるってことは、そう、俺は手鏡の効果でチュートリアル以降はリアル顔になっている、だから、草原の時と森の時では、俺の顔は変わっている」

何にも分かっていないじゃないか。

「だけどな、あんたは俺の顔を見て判断したんじゃない、俺のプレイヤーネームを見て判断したんだ」

そう言っつて、キリト少年は少し溜めて、

「浮かんでいるんだろう？ 俺のアバターの上に、プレイヤーネームがな」

キリリとした顔でそう言っつた。

「……くつくつ」

やめろ、俺を笑わせないでくれ！

分かってている、キリト少年が真面目な話をしているのは、雰囲気でも伝わってくるから。

だけどそのキリリとした顔はやめてくれ！

笑いをこらえるのが辛い。

だけど、大声で笑うわけには行かない。

こんなにキリト少年は真面目に話しているんだから。

今はよく理解できないことばかり言っているが。

「あんたとここであつた時、一瞬、俺の上を見たよな？ それは、俺のプレイヤーネームを確認するためだったのだろう？」

上を見た？

ああ、キリト少年と会つた時に、咄嗟に名前を忘れてしまつて、一瞬考えた時に、無意識のうちに顔が上に向いていたのか。

だが、プレイヤーネームの確認？ なんだそれは？

「普通のプレイヤーが相手の名前を確認する手段は、パーティを組んだりする必要があるが、茅場側のアんたは違う、あんたは管理者権限

「何がおかしい？」

キリト少年は鋭い目つきで俺を睨みつけている。

それどころか殺気まで感じられる。

それはそうか、大真面目に話していたのに、いきなり聞いている人間が大笑いなんてしたら、キレても仕方ないだろう。

「いや、すまなかったな、キリト少年」

「どうやら、凶星みたいだな」

ん？ なんの話だ？

「俺を殺しても無駄だぜ？ この話はすでにフレンドに伝えてある、そして、ここでもし俺が死んだら、その瞬間フレンドは全プレイヤーにあんたの情報を発信する手はずになっているからな」

なぜ俺がキリト少年を殺す話になっているんだ？ いつの間に？

むしろ大笑いした俺が殺されそうなものなのだがな。

「あんたも自分の正体が知られるのは不味いよな？ だから、勝負しないか？」

自分の正体？ 前世のことか？ いや、だがキリト少年は何か変な

勘違いをしていたような？

「勝負？」

「ああ、1vs1のデュエルだ」

デュエル、決闘か？

「もしあんたが勝ったら、このことは誰にも言わない、フレンドにも俺の勘違いだったと説明する、だが、もし俺が勝ったなら、あんたの持っているアインクラッドの情報をよこしてもらおう」

アインクラッドの情報？ 前世のか？ 別に勝負などしなくとも、そのくらいならいくらでも話していいんだが。

いや、違うな。

この瞬間、察しのいい俺は全てを理解した。

キリト少年は、最初から俺と決闘がしたくて、ここまで俺を追いかけってきたんだ。

恐らくあの口植物たちが出る森で、俺の強さを感じ取って、俺と

戦ってみたくなつたのだろう。

だが、素直に決闘してくれと頼むのは恥ずかしくて、つい色々訳のわからない話をしたんだろうな。

俺と戦う理由が欲しくて。

つまり、アインクラッドの情報は、単なる理由付けでしかなく、ただ俺と戦いたかつたのだろう。

分かる、分かるぞ、その気持ち。

自分より強い奴を見ると、戦いたくなるものだよな。

俺は戦闘狂ではないが、恐らくキリト少年は戦闘狂なのだろう。

「ふっ、いいだろう」

俺は少年の要求を飲んだ。

すると、キリト少年は剣を左手に持ち替え、右手を振るつた。

その瞬間、キリト少年の前いきなり紫色に光る板が現れた。

・・・あれは・・・昔、どこかで見たことが・・・

そう考えていたら、俺の視界にいきなり、

「キリト から I v s 1 デュエルを申し込まれました。 受託しますか？」

という文字と、その下に、Yes/No というボタンとそのほかにいくつかの文字が浮かんできた。

少し驚いたが、視界に文字が映ることももう慣れてきた。

今だに訳は分からないが。

とりあえず、なんだ？ これはイエスを押せばいいのか？

俺はイエスを押した。

別視点 キリト 1

「あんたも自分の正体が知られるのは不味いよな？ だから、勝負しないか？」

「勝負？」

これは、賭けだ。

もしこいつが、俺のブラフに気づいて、問答無用で排除しにかかって来たら、管理者権限を持つであろうこいつには絶対に敵わない。

システムという絶対的な力が、相手の背後には備わっているんだから。

「ああ、1 v s 1のデュエルだ」

それでも、こいつが持っている情報は、このアインクラッドの攻略に絶対に役に立つ。

それに、こいつをこのまま放置するわけにはいかない。

「もしあんたが勝ったら、このことは誰にも言わない、フレンドにも俺の勘違いだったと説明する、だが、もし俺が勝ったなら、あんたの持っているアインクラッドの情報をよこしてもらおう」

目の前の男は少し悩んでいる様子だ。

だが、こいつには選択肢はないはずだ。

こいつは、俺を殺したらすぐに俺のフレンドがこの男の情報を漏らすと思っているはずだ。

だからこいつは、俺を殺すことができない、こいつだって、目的の為に正体をバラされたくは無いはずだから。

だがそのとき、目の前の男は、まるで全てを理解したかのような表情で、笑った。

その瞬間、俺の背筋に悪寒が走った。

なんだ、この嫌な予感は、俺は何かを見落としているのか？

……いや、大丈夫だ、こいつが俺の嘘を見破れる要素はない。

それに、こいつは俺を殺すわけにはいかない筈だから。

なら、俺を殺さずに無力化してから、先にフレンドを殺してしまえばいいのでは？

いや、大丈夫だ、俺のフレンドか誰かなんて、こいつに分かるはずが……管理者権限……っ！

その瞬間、俺是最悪の可能性に思い至ってしまった。相手は管理者側の人間なんだ。なら、俺のフレンドを調べることが不可能ではないのでは？

つまり、俺のフレンドリストを調べて、その中の誰かを俺よりも先に殺してしまえば、俺の脅しの効果が無くなる。

いや、誰かなんて一目瞭然だ。

だって俺のフレンドリストには、たった1人の名前しかないんだから。

クラインという、この世界で初めて出来た友人の名前しか。

目の前の男は、そのことに思い至ったのだろう。

だから笑ったんだ、俺の策の甘さを見抜いて。

最悪だ。

俺は目の前に見つけた一筋の光に釣られて、とんでもない事をやらかしてしまった。

俺は直葉に、母さんに、オヤジに会いたいという衝動のあまり、自分でも気付かぬうちに焦って、軽率な行動をしてしまった。

その軽率な行為が、クラインまでも危険に晒してしまった。

なんで俺はもつと慎重に考えなかつたんだ！ 相手は管理者側の人間なんだから、もつと万全の対策を練ってから挑むべきだったのに！

本当にすまない、クライン、巻き込んで……

っ、嘆くのは後だ！ まだ取り返しがつくかもしれない！

考える、考えるんだ！ まだ、まだ何かあるはずだ！ ここから逆転する策が！

「ふっ、いいだろう」

っ、なんだって？

いい、といったのか？ デュエルを受けると？

っ、落ち着け、動揺を悟られるな、平然と行動しろ。

俺は動揺を全力で押し殺し、剣を左手に持ち替え、右手でメニュー

を操作しながら、全力で思考を回し始めた。

落ち着いて考えろ、何故こいつはデュエルを受けた？

もしかして、気付かれていない？

もしくは、この男が与えられている管理者権限の中には、相手のフレンドを調べる権限がないのか？

ならさっきの、全てを理解したかのようなあの笑みはなんだ？

まさか、俺のブラフに気付かれたか？

それで、デュエルで俺を殺すつもりなのか？

デュエルにはHPがゼロになるまで戦う《完全決着モード》の他に、どちらかのゲージが半減した時点で終了となる《半減決着モード》、さらにはクリーンヒットが一発入った時点で終わる《初撃決着モード》が設定されている。

このモードの選択権はデュエルをリクエストされた方が決定できるため、俺に選択権はない。

もし、これで相手が《初撃決着モード》、又は《半減決着モード》を選んだのなら、少なくとも俺のブラフには気付かれていないことになる。

だが、もし仮に《完全決着モード》を選んだなら、こいつは俺の嘘を見抜いているということになる。

……いや、《完全決着モード》を選ぶ可能性は、低いはずだ。

俺は、デュエルの申請を目の前の男に送った。

一度冷静になって考えてみると、こいつが俺を殺す可能性は元々低いと思う。

例えば、こいつは死んでもリアルな体は無事だとは言え、俺たちプレイヤーは違う。

ここでの死は、リアルでの死と変わらない可能性がある。

そして、もし本当に死ぬのなら、こいつがその事を知らないはずがない。

だから、こいつが俺たちを殺すという事は、殺人になってしまったという事だ。

少し前に、コペルに殺されかけたから、思考が物騒になっていた。

勿論、コペルという実例がある以上、こいつが人を殺そうとする可能性はあるが、コペルとこいつでは、持っている情報量に差がある。俺たちプレイヤーは、ここで死んだ場合リアルでも死ぬ、という情報は与えられていても、実際にリアルでの生死を確認できる手段はない。

だが、こいつは、事実を知っているんだ。

その差は、かなり大きいはずだ。

ここでプレイヤーを殺せば、人殺しになるかもしれない、と、人殺しになる、では、天と地ほどの差がある。

だから、大丈夫なはずだ。

よく考えてみれば、こいつがああ森で俺たちを助けたのは、純粹に目の前で人が死んでほしくなかったからかもしれない。

俺は穿って捉えてしまったが。

いや、茅場に協力している時点で、それは楽観視が過ぎるか。

1万人ものプレイヤーが死ぬ可能性のある計画に協力しているんだ、だからこいつにまともな神経を期待するのは、辞めるべきだろう。

だが、少なくとも俺のブラフに気付かれていないなら、《完全決着モード》は選ばれないはず。

つまりこいつは、《初撃決着モード》か《半減決着モード》を選択するはずだ。

どっちだ？ どっちを選択する？

そして、目の前の男が選んだのは。

《完全決着モード》だった。

っ!? なんて!? まさか、俺のブラフに気付かれている!?

そして、俺の視界に、

【asada sirou へのデュエル申請が受理されました】

という文字と、60秒のカウントダウンが始まった。

あさだ、しろ、本名か？ いや、間違いなく偽名だろう。

いや、そんなことより!

「……何故、分かった?」

俺の発言が嘘だと。

「目を見ればわかる、俺が気づかないと思っていたのか？」

目を見ただけで、俺の発言が嘘だと分かったのか!?

目は口ほどに物を言う、と言う言葉があるが、それにしたって勘が鋭すぎる。

待て、こいつは《完全決着モード》を選んだ。

つまりこいつは、俺を、殺す気だ。

その瞬間、俺は背筋が凍るような衝撃を覚えた。

本当に、俺を殺す気なのか？

信じられなかった。目の前の男は、俺を殺そうとしている。

M P Kなどの間接的な手段ではなく、直接その手で、俺を。

体が俺の意思に反して勝手に震え出した。

っ、落ち着け、まだ俺が死ぬと決まったわけじゃない、デュエルで勝てばいいんだ。

だが、ここで取り乱したら、間違いなく死ぬしか無くなる。

冷静に考えれば、この状況は悪くない。

これで、クラインは巻き込まれずに済む。

それに、問答無用で俺を管理者権限を使って殺さなかったと言うことは、こいつにそれだけの管理者権限が与えられていないのか、もしくは自分の腕に絶対の自信を持っている、と言うことだろう。

俺に負けるはずがない、と思っっていると言うことか。

舐められている。

だが、今の俺には、その油断につけ込む事ではか、活路は見出せない。

だから、今から考える事は、こいつにどう勝つか、だ。

俺はデュエル開始までの残り時間を確認したのち、冷静に目の前の敵を観察した。

目の前の男は、防具を何もしていない、初期装備のままだ。

それは、絶対に相手から攻撃を受けないと言う自信の表れなのか、単に防具を買うコルが無かったからなのかはわからない。

いや、武器を買ってない以上、コルはあるはずだ。つまり、自信の表れだろう。

もしくは、死の危険がないからかも知れないが。そして、レベルは俺と同様くらい、いや、若干俺の方がレベルが高い可能性がある。

拳と武器、しかもソードスキルを使っている俺と、目の前の男では、間違いなく敵を倒す速度は俺の方が早かったはずだ。

だからレベルは俺の方が有利、もしくは同等と言ったところだろう。

そして、武器は拳、リーチは圧倒的に俺の方が……いや、腰に剣を下げている？

あの剣は、俺と同じ《アニールブレード》か？

いつの間に？ ……もしかして、最初から？

その事実には、俺は愕然とした。

俺は今まで気がついていなかった。

別に隠れていたわけではない。目の前の男の腰には、堂々と剣が吊るされていた。

ゾツとした。

今まで相手の腰に下げられた剣に気がづかなかったほど、俺には余裕が欠けていた。

つまり、周りが全然見えなくなるくらい、緊張していたと言うことだ。

もしこのまま腰の剣の存在に気がつかずに、丸腰の相手だと思って挑んでいたら、一瞬のうちにやられていた可能性が高かった。

もつと考えるべきだった。何故こいつが《ホルンカ》の西の森に来たのか。

そんなもの、「森の秘薬」クエをやるために決まっている。

だが、俺はこいつの戦闘方法は、素手による体術だけだと勝手に思い込んでいた。

だからその可能性に思い至らなかった。

しかし、当然ながら素手ではダメージがあまり通らない。

低階層ならまだ素手でも戦えるのかもしれないが、敵が強くなっていけば素手などで戦えなくなるはずもない。

開発者側のこいつが、それを知らないはずがない。

それに、テストプレイか何かの時、上の階層でもずっと素手で戦っていた、なんて事はよく考えたらあり得ないことだ。

だって、武器を、ソードスキルを使わずに戦っていたなら、それはもうテストではなくなってしまうから。

なら、実はこいつの本当のメインウェポンは素手ではなく、片手直剣と言うことだろうか？

なら何故、今まで素手で戦っていた？

その時、俺は一つの可能性に至った。

……ただ、遊んでいただけ、なのか？

こいつはこのゲームで、縛りプレイをしていたのか？

この命のかかっているゲームで、縛りプレイなんてしている奴がいることなど、考えたこともなかった。

だが、こいつには命の危険はない。

だから、遊んでいたのか？ 俺たちが命をかけて戦っている横で。

その時、俺はようやくこの男のことが少し理解できた。

こいつは、俺たちのことなんて、なんとも思っていないんだ。

こいつは自分の欲求のために、ただこのゲームを楽しむためだけに、茅場に協力しているんだ。

俺たちがどうなろうと、こいつにとっては知った事ではないんだ。

あの森でリトルペネントに囲まれていた俺たちを助けたのは、目の前で人が死んでほしくなかったからでも、助けられる命は助けようとした、でもない。

なぜなら、本当に俺たちのことを助けたいと思っていたのなら、茅場の協力者であるこいつは、こいつだけは止めることができたはずなんだ。

このゲームがデスゲームになることを！

なのに、こいつは止めるどころか、茅場の協力までしている。

俺たちプレイヤーの命よりも、自分が楽しむことを優先しているんだ！

許せない、許せるわけがない！

こいつだ、こいつのせいだ、こいつのせいで、俺たちプレイヤーはこのゲームに閉じ込められ、今も沢山の人の命が危険にさらされていて、俺は家族と引き離されたんだ！

こいつは、敵だ。俺たちプレイヤーの、紛れもなく敵だ。

負けられない、絶対に、こいつにだけは負けるわけにはいかない！

もう、俺の頭の中には、こいつから情報をいただくなんて言う考えは消え去っていた。

ただ、目の前の敵を倒すと言う思考に、頭が支配されていた。

「ふ、なかなか心地良い殺気だな、さあ、どこからでもかかってこい」

そして、カウンtdownがゼロになった。

「うおおおおお!!」

その瞬間、俺は全力で目の前の敵に斬りかかった。

第12話 VSキリト

イエスノーボタンの上に、初撃決着モード、半減決着モード、完全決着モードと書かれた文字が3つ並んでいる。

これは、決闘のルールか何かだろうか？

これを俺が選ぶのか？

初撃決着モードと完全決着モードというのはなんとなくわかる。

要するに、1撃攻撃を当てた方が勝ちと言う決闘と、完全に勝負がつくまで終わらない決闘、と言うことだろう。

だが、この半減決着モードと言うのはなんだ？

何が半減したら決着するんだ？

体か？ 体が半分になったら勝負がつくのか？

流石に体が半分なくなれば生きていけないと思うのだが。

いや、何かしらの枷をして戦うのだろうか？

例えば、動き易さを半減、つまり何か重石を体につけて戦ったり、もしくは武器の切れ味を半減、つまりなまくらな武器で戦うのだろうか？

これだろうな。相手の体を半減させるまで戦いが終わらない、と言うことではないだろう。

さて、何を選ぶか。

いや、キリト少年が決闘しようと言ってきたんだ。キリト少年が望む決闘にするべきだな。

当然、キリト少年が望む決闘は、完全に勝負がつくまで終わらない、完全決着モードと言うやつ以外にはあり得ない。

俺は完全決着モードと言う文字を押した。

すると、60と言う文字が出てきて、それが59、58、と減っていった。

これは、時間制限？ この間に決闘を終わらせなければならぬのだろうか？

いや、キリト少年が動き出す気配はないから、違うだろう。

というより、キリト少年は俺が完全決着モードを押した瞬間、少し

驚いている様子だった。

「……何故、分かった？」

なるほど、キリト少年は、俺がキリト少年が望む決闘方法を選んだことに気がついてるのだろう。

そして、考えを当てられて少し驚いたと言ったところか。

「目を見ればわかる、俺が気づかないと思っていたのか？」

俺の発言に対して、キリト少年は少し驚いた表情を浮かべていた。キリト少年が戦闘狂である事に、俺が気づかないとでも思っていたのだろうか？

俺は戦闘狂ではないが、キリト少年は間違いなく戦闘狂だ。

そんな戦闘狂が、一撃で終わってしまう決闘や、制限をつけた決闘などで満足できるはずがない事など分かりきっている。

つまり、完全に決着をつける決闘以外選択肢などないことは簡単に予想がつくことだ。

さて、残りの時間は後少し。

もう直ぐ決闘が始まるはずだ。

その時、キリト少年から強い殺気が俺に放たれた。

俺に本性を知られてしまっている以上、もう隠す必要はない、と言うことか。

キリト少年の出す殺気は、まだまだ未熟で鋭さが足りていない。

その程度では、敵に自分の存在を無視させないことも、相手を怯ませることも出来ないだろう。

だが、とても純粹で、強い思いが込められた殺気だ。

悪くない。

「ふ、なかなか心地良い殺気だな、さあ、どこからでもかかってこい」
そして、数字が0になった瞬間、キリト少年が駆け出してきた。

「うおおおおお!!」

俺は鞘に収まる剣の鞘に右手を添え、キリト少年を待ち構えた。

キリト少年は真っ直ぐ、感情に身を任せて、全力で向かって来ているのだろう。

しかし、隙だらけだ。

あまり人との戦いをしてこなかったのだろうか？

勿論、剣を持ちたての初心者動きではないが、それでも……ん？

その瞬間、キリト少年の剣が仄かな水色に発光した。

そして、キーン！ という音を出しながら、急激にキリト少年の動きが早くなった。

その緩急に、一瞬対応が遅れた。

その為、今からでは剣を抜く余裕がなかったため、俺はギリギリまで引きつけ、キリト少年が剣を振り始める直前に一歩後ろに下がった。

それにより、キリト少年の斜め切りは、俺の目前を素通りした。

その後、剣の光が消えた。

俺はそのまま居合斬りで、キリト少年の首を狙おうとした。

キリト少年はかなりの大振りをした為、少しの間隙ができるかと踏んで。

しかし、キリト少年は剣を振るつた後、体勢を立て直すでも、もう一歩踏み込んで更に追撃を加えようでも、俺の攻撃を警戒して防御に努めようでもなく、そのままの体勢で固まっており、あまりにも無防備すぎたため、俺は大きく後ろに下がった。

あれは、俺を誘っているのか？

あまりにも隙だらけすぎて、逆に罠ではないかと思った。

それにしても、先程は驚かされた。

剣が光る原理はわからないが、それでもまさかあそこから更に速度が上がるとは思わなかった。

明らかに全力を出している様子であったと言うのに。

先程の考えは訂正しよう。キリト少年は戦い方が上手い。

先程のあまりにも隙だらけな様子は、こちらの油断を誘う為の策であり、そうして油断した相手を、その急速な緩急により一撃で仕留める、なかなかいい手だ。

あの緩急に初見で対応するのは、余程戦場に慣れ親しんでいなければ難しい。

先程の俺はカウンターを狙うために、キリト少年を待ち構えていた。

つまり、キリト少年の動きを注視していたため、俺は先程の攻撃に対応しきれたが、そうで無ければ、もしくは、あの隙だらけな様子に油断でもしてしまっていたのなら、完璧に避けきることは出来なかったであろう。

しかし、あの猿との戦いで油断を戒めた俺には、通用しなかったがな。

しかし、あの一瞬は完全にキリト少年は俺を上回っていた。

惜しむらくはほんの少し緩急の急を出すのが早かったことだな。

だが、それでもあの速度で動けるのなら、今の俺にとってはなかなかの強敵だ。

少し楽しくなって来た。

さあ、次はどのような手でくる？

先程の一撃で終わりではないのだろうか？

キリト少年は、これから様々な手を使って、俺の予想を上回ってくれるのだろうか？

俺はこれからの戦いが、とても楽しいものとなる予感がして、とても期待した。

俺が接近してくる気配がないことを悟ってか、固まっていたキリト少年は突然動き出した。

「うおおおおおおお!!」

キリト少年は剣を左に大きく引き、その瞬間、刀身薄水色の光が包んだ。

そして、キーンという音を発しながら速度を上げて切りかかってきた。

その緩急は一度見た。

二度通じると思われているのは遺憾だな。

俺はキリト少年の横薙ぎを、余裕を持って躲した。

そして、またもやキリト少年は振り切った状態のまま固まった。

今回は先程より大きく離れているため、固まる必要はないと思うの

だが。

その後、またもや唐突にキリト少年はこちらに向かって動き出した。

「らあああああ!!」

キリト少年は剣を大きく頭上に振りかぶり、その剣が薄青く輝き、キーン! という音を発しながら急撃に速度を上げて切りかかってきた。

三度目だ。その緩急が未だに通用すると思っっているのだろうか。そろそろ他の手も見せて欲しいものだな。

俺はキリト少年の縦斬りを右に躲し、その振り切って無防備を晒す少年の懐に潜り込みながら鞘から剣を抜き、キリト少年の首筋の少し手前で寸止めした。

「っ!」

「どうした? この程度ではないだろうか?」

先程警戒していた罫は、特になかった。

キリト少年は、首に剣を当てられているにもかかわらず、振り下ろした剣をそのまま俺に向かって斬り上げようと体を動かした。

その瞬間、俺は剣を引き、右前方に飛び込むように転がって、キリト少年の剣を躲しながら、少し距離をとった。

そして、俺の背後から、キリト少年の足音と、剣を振り上げる音が聞こえてきた。

しかし、キーンという音は聞こえてこなかった。

そして何よりも嫌な予感というものがしない。

俺はそのままキリト少年に背を向けながら、ゆっくり立ち上がった。

俺は今、戦いの最中であるにもかかわらず、キリト少年から目を離している。

俺はあの猿に対して、戦場で敵から目をそらすなど、殺して下さいと言っているようなものだと思った。

つまり、キリト少年も同じように思っっているだろう。

今の俺は隙だらけだと。

だが、俺はキリト少年の動きを完璧に把握している。背を向けていてもわかる。

キリト少年の気配が、その剥き出しの殺気が。

だから見ていなくとも、むしろ見ていない方がキリト少年の動きが分かる。

キリト少年が俺の背に剣を振り下ろそうとした瞬間を狙い、俺は振り返りながら剣を振るった。

そして、甲高い音が辺りに響き渡り、それと同時にキリト少年の手から剣が回転しながら飛び去っていった。

その剣は、少し離れた地面に突き刺さった。

「っつなっ!」

攻撃を繰り出す寸前の一瞬は、腕から力が抜ける。

だからその瞬間に武器を攻撃すれば、相手の手から武器を吹き飛ばすことができる。

ただ、腕から力が抜けるのはほんの一瞬。

今回は、キリト少年が分かり易すぎるほどの気配を、殺気を放っていたからタイミングが掴みやすかったが、慣れていなければ難しい技だろう。

キリト少年は、自分の武器が手元から離れたことに動揺してか、一瞬動きを止めてしまった。

その隙を逃すことなく、俺はキリト少年の首筋を狙い一刀を放ち、当たる寸前で動きを止めた。

「これで、終わりか?」

「お前は、この程度なのか?」

「違うよな?」

第13話 空腹

「まだ戦う意思があるのなら、剣を拾え」

キリト少年は、剣を拾った。

その後、キリト少年は豹変した。

先程までは、荒れ狂う戦闘狂といった雰囲気であったのに、これ以降は冷静な狩人といった雰囲気変わった。

まあ、だからと言って、先程までよりも強いかと言われれば微妙なところだが、動きは悪くない。

冷静な狩人となったキリト少年は、先程までよりは守りが固くなり、完全に虚を突かなければ首への寸止めは行えなくなった。

攻撃も、なんとかこちらの虚を突こうと頑張っている。

しかし、一番初めの緩急のように、俺の予想を上回るような行動がない。

やはり最初の緩急がキリト少年の必勝の策で、その策が破られたことが少ないから、通用しなかった相手との戦いに慣れていないのだろう。

キリト少年はどうやら、常にあの剣が光っている時の速度が出せるわけではないようだ。

あの急激な加速は、剣が光っている間だけの限定なのか、もしくは俺にそう思わせたいだけなのかはわからないが、剣が光っている時しかキリト少年は加速しない。

剣の正確性もそうだ。

あの剣が光っている時は、体全体を使っつてしっかりと剣を振るっているのだが、それ以外では少し剣に振り回されている。

剣を、己の体の一部のように扱えていない。

恐らくキリト少年は、いつも持っている剣と重心の位置や重さが変わっており、その感覚の違いが太刀筋を狂わせているのだろう。

良く見るとキリト少年の今の武器は、あの口植物達が出た森で使っていた武器と違って、まだその武器に慣れていないんだらう。

そして、剣の光が収まった後、キリト少年の体は毎回一瞬硬直している。一瞬とはいえ、戦場においてその一瞬は致命的だ。

なぜ硬直するのかわからない。急加速の副作用なのだろうか？

俺はその隙を逃すほど甘くはない。

だからかは分からないが、キリト少年は途中から剣を光らせるのを完全にやめた。

剣を振るった後に、一瞬であろうとも体が動かなくなるのは、本当に致命的だ。

その1撃で勝負を決められるのならいいだろうが、決められなければ、一瞬の隙を敵に晒すことになる。

一瞬の隙に対応できない敵との戦いならば問題ないが、俺がその一瞬を逃さないのだから、光る剣を使わなくなったキリト少年の判断は間違っではないだろう。

そして、恐らく武器を持つ相手との戦いは行ってきたのだろうが、体全てを使って戦う相手とは、あまり戦ったことがないのだろう。

キリト少年は、俺の剣の動きは良く見ている。

だが、攻撃に体術を織り交ぜたり武器を空中に放り投げたときに、その動きが予想外だったのか、大きな隙ができた。

こういった行動をとる敵とは戦ったことがないのだろうか。

とにかく、キリト少年には圧倒的に経験が足りない。

だが、言ってしまうばそれだけだ。

キリト少年には、光るものを、圧倒的な才能を感じる。

キリト少年は、この戦いの最中だけでどんどん成長している。

色々な策を考えるだけの頭もあるし、そして何より反応速度が速い。

反応速度、俺は常にキリト少年の気配や殺気から次の行動を予測できるため、俺の方が圧倒的に有利なのだが、そんな状況でも、完全に虚を突かなければ、キリト少年は俺に食らいついてくる。

つまり、気配や殺気を読まずに戦えば、反応速度はキリト少年の方が上という事だ。

反応速度というのは、戦いにおいてかなり重要なものだ。

相手の反応速度が早すぎると、こちらの全ての攻撃に対して対応してくるし、相手の虚を完全についたカウンターでもタイミングを少しでも誤ればカウンター返しが飛んでくるから本当に困る。

ああ、懐かしいな。

この少年を見ると、カズヤのことを思い出す。

カズヤとたまに喧嘩して戦った時は、俺の攻撃のほぼ全てに対応されて殆ど勝てなかったからな。

何をやっても全て対応してくるのは、とても戦いづらく、とても楽しかった。

勿論、記憶が無くなるくらいに全てを本能に任せて戦えば、また結果は違うのだろうが、喧嘩でそんなことをしていたら、殺し合いになつてしまうからな。

キリト少年もあと5年、いや3年ほど経験を積みれば、カズヤのように、いや、カズヤ以上になれるかもしれない。

だが、今はまだまだ足りない。

これでは熱くはなれない。血がたぎるような、痛みさえもが気持ち良い戦いは、今のキリト少年とはできないだろう。

俺は軽く剣を振りあげ、キリト少年の意識が剣に向いた瞬間に、キリト少年の足を払い、体勢を崩したキリト少年の手を剣の横で叩いて、持っている剣を手放させた。

「くっ、っ」

俺はそのままキリト少年を組み伏した。

そして、剣をキリト少年の顔の横の地面に突き立てた。

俺がキリト少年を組み伏せている関係上、キリト少年の顔が俺の目の前にあるのだが、今だにキリト少年の顔には諦めの色が一切ない。

これほどまでに圧倒的な実力差を見せているにも関わらずだ。

キリト少年の瞳には強い闘志が浮かんでいる。

「……惜しいな、実に惜しい」

「……何？」

このままキリト少年を殺してしまうことが、実に惜しい。

勿体ない。

キリト少年には戦い才能があり、圧倒的な力量差を前にしても諦めることをしない強靱な精神力も持っている。

そんな将来とても素晴らしく強くなるであろう人間を、いまだに未熟なうちに殺してしまうのは、本当に勿体ない。

勿論、キリト少年から挑んできた戦いだ。

キリト少年も当然死ぬ覚悟くらいはしているだろうし、むしろ殺さないことの方が相手に対する侮辱になることくらい分かっている。

だがそれでも、だ。

「やめだ」

「……は？」

俺は立ち上が理ながら、地面に刺した剣を抜き、鞘に収めた。

「今のキリト少年を殺してもつまらん」

「っ！」

そのまま俺はキリト少年に背を向けて歩き出した。

「強くなれ、キリト少年」

「待て！」

しかし、俺はキリト少年に呼び止められた。

「どうした？ ああ、俺が一方的に勝負を切り上げるんだ、この決闘は俺の負けだ」

完全に決着をつける前に、つまり、殺す前に勝手に俺が勝負を投げ出したんだ、当然俺の負けだろう。

そう言えば、決闘で負けたということはアインクラッドの情報をキリト少年に伝えなければならぬのか。

「参ったな」

別に教えるのは構わないのだが、俺の知るアインクラッドの情報は膨大だ。

全てを教えていたら何日掛かることやら。

今は早く先に進みたい気分なんだが、いや、約束は約束だ。

俺はキリト少年の方に向き直った。

すると、キリト少年と俺の間にWINNER／Kirito 試合

時間／429秒という紫色の文字が書かれた透明な板が浮かんでいた。

「なんだこれは？ ……ふむ、この文字はキリト少年が勝利したと言っているのか。」

「何故こんなものが浮かんでいる中などの原理は相変わらず分からないが、キリト少年の勝利というのは正しいな。」

「さて、アインクラッドの情報、何から話すか。」

「とりあえず、昔シムセスから聞いたアインクラッド昔話からするか。」

「その昔、大地には森エルフの何とか王国や、黒エルフの《リユースラ王国》人間の《九連合王国》、ドワーフの何とか王国やその他の種族が暮らす国があった」

「案外覚えているものだな。」

「しかしある時、色々な国が大地ごと円形に切り抜かれて空へ浮かべられた、そして鉄やら石やらで補強され、それらが何回層にも重なった」

「話していると、だんだん思い出ししていく。」

「それ以降、人間だけではなく、エルフもドワーフもおまじないのほとんどが使えなくなり、人間の国は滅び、階層ごとの交流もほとんどなくなった、それがここ、アインクラッドだ」

「まあ、これはあくまで前世の世界での話だ。」

「だが、色々と似ているところが多いし、キリト少年は俺の持っているアインクラッドの情報をよこしてもらおうと言っていた。」

「だから何の問題もないだろう。」

「さて、次は何を話せばいいか……そうだ。」

「キリト少年が聞きたいことを答えればいいのか。」

「さて、何が聞きたい？」

「……ゲームクリア以外でログアウトする方法は？」

「ん？ 何の話だ？ アインクラッドの話じゃないのか？」

「ログアウト、あの亡霊も言っていた言葉だな、相変わらずそれがどんな意味なのかは分からないが。」

「知らん」

「……嘘だ」

「何？ 俺が、勝負の約束事を違えらなくても思っているのか？」

その侮辱を前に、俺は思わず目が細くなり、語調が荒くなった。

「っ!? だ、だが、あんたは知ってるはずだ！ 茅場側のあんたなら元の世界に帰る方法を！ 何かあるだろう！ 緊急用の脱出手段とか！」

元の世界に帰る方法？

「第百層に行けばいいだろう」

「そんなの！ ……っ、それ以外には、無いのか？」

「知らん」

「……なら、あんたはどうやって帰るんだ、いつでも帰れるんだろう」「何を言っている？ 第百層に行くしか、元の世界に帰る方法などないだろう」

確か、あの亡霊がそう言っていたのではなかったのか？

まだすっかり亡霊の言葉を理解できてはいないが、逆立った赤髪の親切な男の話と合わせれば、そうなると思ったのだが。

「……アンタは……」

それ以降、キリト少年は黙り込んでしまった。

ふむ、とりあえずはもう聞くことが無いのか？

なにもアインクラッドのことをキリト少年から聞かれなかったのだが。

まあ、いいか、一応の約束は果たした。

俺の持つアインクラッドの情報を少しではあるが話したからな。

「またアインクラッドの事で聞きたい事があればいつでも答えよう、では、さらばだ、強くなれ、キリト少年」

俺は今度こそキリト少年に背を向けて歩き出した。

その後、俺は次の街へ向かいながら、モンスターを倒し続けた。

あまり周囲にモンスターの気配がしない場所が所々にあり、そう言ったところで仮眠を取っているため、眠気はない。

だが、空腹が酷い。

あれから、約2日間くらい時間が経っただろうか。

流石に2日間戦いながら歩き続けていると、俺は迷子になってしまったのだろうかと不安になった。

だが、遠くに次の街が見え始めてきたので、俺は迷子ではなかったことが証明された。

だが、2日は長かった。お腹がとても空いた。

まだ、この世界に来て何も食べていない。

気が狂いそうになる。

だが、何故か体が動かない、と言ったことはない。

ここまでお腹が空いているのにもかかわらず、体の調子は一切悪くなっていない。

「俺の体、本当にどうなってしまったんだ……」

それだけじゃない、俺は、いつの間にか顔も変わってしまった。

昨日、偶々泉の近くを通りかかったため、そこでたらふく水を飲んだのだが、水面を覗き込んだ時に、とても驚いた。

誰か知らない人の顔が、泉に写り込んだのだから。

一瞬、俺が気配を読みきれない相手が近くにいるのかと思い、飛び上がりながら剣を抜いてしまったが、周囲に誰もいないことを確認してもう一度泉を覗き込むと、見間違いではなく俺の顔が変わっていた。

訳がわからない。

痛覚が消え、顔が変わり、空腹でも体には異常がない。

流石にこれらを訳がわからないと放置するのはまずい気がする。

次の街に着いたら、すぐに情報収集をすることにしよう。

俺は遠くの街に向かって歩き出した。

そして、しばらく敵を倒していると、途中から敵の足元に、敵の体の一部が落ちるようになった。

爪や牙、皮や瞳など、種類は様々だが、何故か青く爆散した場所に

そういったものが残るようになった。

「……何故だ？」

また訳がわからないことが。

一瞬、確率で敵の体の一部が残るのかとも思ったが、一度出始めて以降は、必ず落ちるようになっていたため、違うだろう。

ここまで確率が偏ることはよっぽど無いだろうから。

「はあ、何故こうも、分からないことだらけなのだろうか」

俺はきちんと常識は持っているはずだ。

なのに、この世界は俺の常識とは何もかも異なる。

俺は天井を見上げながら、ため息をついた。

流石に、分からないことが多すぎる。

早く街に行つて、情報収集をしよう。

いや、敵の体の一部が残るようになったんだ、先にこれら売り払つて飯を食べよう。

まあ、何にせよ、敵の体の一部だけでも残るようになったのは嬉しいことだ。

これらを売れば、ある程度のお金は稼げるだろう。

だから俺は、敵が落とした部位をできるだけ持つていつている。

そのせいで今は両手がふさがつていて、敵の気配を近くで感じたら、すぐに敵の体の一部を地面に置いて武器を抜き、敵を倒して、また持つて、というのを繰り返している。

面倒くさい。とても面倒くさい。

バックが欲しい。もしくは大きめの袋が。

一々地面に置いて、戦つて、また持つて、というのを繰り返すのは本当に気が滅入つて来る。

だからと言つて、これらの敵の体の一部を持つていけないなどという勿体無い事はしないが。

早く次の街にいこう。

そうして、次の街についた俺は、早速モンスターの体の一部を道具屋の店主に売り払いに行った。

「全部で3219コルだ」

俺は、素材を店主に売り払った。

コルというのは、元の世界で言うところのお金だ。

よし、これでようやく食事にありつける。

くっ、飢餓感がかなり辛い。今日の前に食料を置かれたら、例えばそれが嫌いなものでも飛びつくだろう。

だから、早く飯屋に入ろう。

その後は、武器もかなり刃こぼれしてきたから、研いでもらわなければならぬ。

あんなにも早く刃こぼれさせてしまうとは、驚くほど武器の使い方が下手になっている。

あの程度の柔らかさの敵なら、たとえ何千何万と切ったところで刃こぼれなどさせない技量と自信を持っていたのだが。

キリト少年との戦いでも、剣をまともに勝ち合わせたのは数回程度だけだ。

それなのに、ここまで武器をボロボロにしてしまうとは、本当に腕が衰え過ぎている。

「毎度あり」

店主がそういうと同時に、目の前に山のようにあつた敵の部位は、一瞬にして消え去った。

だが、俺は特に驚きはしなかった。

もちろん、目の前から物が一瞬で消えるというのは、驚くべきことではあるのだろうが、今はそれ以上に食欲に支配されているため、そんなことは正直どうでもいい。

今更わからないことが1つ2つ増えてもどうでもいいから、早く飯を食べたい。お腹すいた。

そして、俺の視界に、3219コルという文字が浮かんで、消えた。

……………ん？

「店主、コルは？」

第14話 コル

俺は、モンスターの体の一部を大量に売ったにもかかわらず、店主はコルを渡してくれなかった。

詐欺か？

「コルを受け取っていないのだが？」

「何を言っているんだ？」

いや、そのままの意味だが。

何だ？ この店主はもう俺にコルを払ったと言っているのか？

だが、俺はコルをもらっては……いや、決めつけるのは良くないか。

何だったか、確か元の世界には電子マネーという不思議なお金があつたはずだ。

よく分かつてはいないのだが、何でもカードをかぎすだけでお金が払ったことになるという。

俺は持っていないかったが、なんかそんなやつだ。

それか？

いや、俺はカードを持っていないんだが。

……そうだ、なら試しに店の物の何かを買ってみよう。

もしこれで買えるのなら、俺は知らずのうちにカードのようなものを持つていたということになる。

とりあえず、俺は手近な瓶を手に取り、店主の前に置いた。

「すまんが、これをいただけれるだろうか」

「100コルだ」

すると、俺の目の前にYES／NOというボタンが浮かんできた。

俺はYESを押しした。

「毎度あり」

……買った、のか？

俺はコルを持っていないのに。

俺はそのまま店を出た。

「……店主は、文句を言いに来るわけではない、つまりこれは俺のもの？」

お金は、自動で払われるという事か？ ……すごいな、凄すぎて言葉が出てこない。

と、いう事はだ、あの3200コルくらいは、いや、1000コル使ったから3100コルくらいを、今俺は持っているということか!?

なら、俺はようやく、これでようやく飯が食える!!

俺は飲食店に向かって走り出した。

そして、飲食店に入り、飯を頼んだ。

そこでふと我に帰った。

大丈夫だろうか？ 本当に俺はコルを持っているのだろうか、と。

実はあの店主にいたずらをされていただけで、本当は俺はまだお金を持つていなく、ここで食事をしてしまったら無銭飲食になってしまふ、ということは無いだろうか？

しかしその不安は、料理が目の前に運ばれてきた瞬間に消え去った。

思考が、理性が消え去り、俺は目の前の食事にかぶりついた。

「……美味しい」

ああ、美味しい。数日ぶりに食べる食事の何とうまいことか。

そして、いつの間にか目の前から食料が消えていた。

「……なに!? 食事はどこに行った!？」

何処だ!?! いつの間!?! この俺に気付かれずに食事を奪った奴がいたのか!?! なんてことだ!?! これでは俺は空腹のあまり餓死してしまう!!

……ん？ あまり空腹が感じられなくなっているな。

あ、そうか、俺が食ったのか。

「……すまなかった」

周りには他の客はおらず、店員しかいなかったが、恥ずかしい事をした。

もし他の客がいたなら、営業妨害になるところだった。

気をつけよう。

しかし、空腹がここまで俺を狂わせるとは。

腹は出来るだけ減らさない方がいいな。

……それにしても

「美味かった」

空腹は最大の調味料と言ったか？ まさにそれだ。
まるで天にも昇る気分だ。

そう、現に今も一切の体の自由が消えて無くなり、視界も真っ暗になっっている。

まるで死んだかのように。

……ん？

そして、目の前にディスコネクション警告という文字が浮かんできた。

……ん？

体が、動かない。

………ん？

俺は、そのまま約1時間ほど体が動かなかった。

しかし、1時間後、体が動くようになった。

「……何だったんだ？」

あまり食事を取らなかつた反動か？

……そうだな、そうに違いない。

やはり、食事はきちんと取らなければならないか。

だが良かった。もし体が動かなくなつたのが店の中ではなく、道路や、モンスターが出る街の外だった場合、大変なことになっていただろう。

「……ゾツとするな」

やはり、知らないことはまずいことだ。

色々と街の人間に聞いて回るか。

だが、街の人間に情報を聞こうとしたが、あまり情報は得られなかった。

聞き方がそもそも難しく、自分でもなにが分かっているかが分からないので、上手く質問できなかった。

「……まあいいか」

とりあえずは空腹にさえ気を付けていれば問題ないだろう。

流石にまた視界が暗くなり体が動かなくなるのはごめんだからな。

その後、俺は武器を修理してもらい、しばらく街の周辺で狩をした。

そして、取ったものを売って、そのお金で食事をとり、バックを買い、武器を修理してというのを繰り返していた。

武器は、もう一本買うか悩んだが、もうしばらくは保留することにした。

なんとなく、まだ剣一本で戦っていたい気分だったから。

そうして、それらを繰り返しながら、ある程度時間が過ぎた後、次の街に行つて、またそれらがある程度繰り返した後、次の街に行つて、を繰り返して、この世界に来てから2週間後ほどで、《天柱の塔》の近くの街にたどり着いた。

《天柱の塔》というのは、昔、前世でシムセスから聞いたあの次の層に行ける塔のことだ。

確か、あそこは20階建だったか？

それで、20階には守護獣がいる。

とても強い奴だ。

前世では4人で挑んだ敵、だが今回は1人。

倒すのに一体どれだけ時間がかかることやら。

いや、そうでもない、か。

前世のこの頃はまだまだ未熟だった。

だから、今の俺ならもつと早く倒せるかもしれぬ。

この錆びついた腕でもな。

俺は、塔を登り始めた。

しかし、ここからあまり攻略が進んで行かなかった。
塔の中の敵が多すぎた。

敵が同時に10体も20体も出てくるわけではない。
勿論10体、20体くらいなら同時に出てこようが対処しきれ
が、そういう事ではなく、沢山の敵全てを倒していたら、どうしても
先に武器が刃こぼれしてしまう。

少なくとも20階に着くまでには武器が壊れてしまっているだろ
う。

己の腕が錆びついているから、こんな有様なのだろうと、しばらく
は少し、10階くらいまで登って武器が刃こぼれして来たら帰って、
その道中で倒した敵の一部を拾って、売って、武器を直して、また挑
んでを繰り返していたが、一向に腕が良くなって行かない。

武器が壊れかけるのはほぼ同じくらい武器を振るったタイミング
だ。

そうして、もう1週間程度が経過してしまった。

「どうするか」

選択肢は2つ。

沢山の武器を買い、消費しながら進んでいくか、もしくは敵をかわ
しながら進んでいくかだ。

沢山の武器を買うか？

いや、それはやめておこう。

確かに武器は消耗品だ。

いつまでも使い続けるわけには行かない。

だが、確かに武器には魂が宿っている。

それを蔑ろにすれば、いつか必ず己が報いを受ける日が来る。

昔何処かで聞いた言葉だ。

だから、沢山の武器を使い捨てにするのはやめよう。

なら、敵を避けて進むか？

《天柱の塔》にいるモンスターは、確か全て外敵から塔を守る守護獣の分類に入ったはずだ。

そして、20階にいるのはその中の主で、そのほかのところにいるのが子分みたいな感じだったか？ よく覚えてないが。

それにあそここの塔からモンスターが溢れ出た等の話は聞いたことがなかったはず。

なら、倒さずに進んでもいい、のか？

……行くか。

俺は極力敵と合わないように隠れながら塔を進んで行くことにした。

見つかった。走って逃げた。

見つかった。走って逃げた。

見つかった。走って逃げられなかった。

相手の方が足が速い。

俺は相手の足を切り、走って逃げた。

見つかった。見つかった。見つかった。

「……」

ダメだ。見つかる。

とりあえず、見つかったモンスターは倒しておいたが、これでは前と何も変わりがない。

隠れんぼには少し自信があったのだが。

当然気配は紛れ込ませている。

しばらくこの辺りのモンスターとは戦っていたから、モンスターの気配は覚えた。

その気配を極力真似しているのだが、なぜかバレる。

視覚にも入ってはいなかったはず。

……嗅覚か？

相手は赤い体で2足歩行の犬みたいな奴だ。

そうか、俺は匂いでバレているのか。

……俺は、臭うのか……

当然か、しばらく風呂に入れていないからな。

だが、自分では自分の匂いは分からないものだな。

しかし、何をしても見つかるというのなら逆に話は早い。

真っ直ぐ、ただひたすら走り続ければいいだけのことだ。

足の速いやつの足だけ切つてな。

敵の攻撃は殺気を読めるから背後からでも余裕で避けられる。

「よし、行くか」

俺はもう気配を隠すことすらやめてただ走り続けた。

走り出してから、すぐに後悔した。

モンスター達はいつまでも俺を追いかけて来る。

足を切つたやつは流星についてこれなかったようだが、俺と同速

か、少し遅いやつらが今俺を後ろから大量に追いかけて来ている。

その数、約50以上。

流星にこの数を1人で相手にしたことはない。

というより、相手にする前に押しつぶされて死にそうだ。

だが、大丈夫だ。

俺より速いやつがないということは、俺が止まらなければ追いつかれることはないということだからな。

「余裕だな」

そう思っていたら、目の前には宝箱があった。

宝箱しかなかった。

道が、なかった。

袋小路だ。

「……やば」

後ろからは無数の足音と鳴き声。

前方には壁。右も左も壁。

なんとか隙間を縫って通り抜けるか？

後ろを向くと、狭い通路に所狭しとモンスターが並んでいる。

少なくとも、俺が通れる隙間は無さそうだ。

いや、あった。

俺は振り向いて、モンスター達の左側壁面に走り出した。

そして、その勢いそのまま飛び上がり、壁を蹴って先頭のモンスターの頭を足場にして、そのままモンスターの群れの頭上を通り抜けていった。

「上がガラ空きだな」

当然、下から武器を振り上げて攻撃して来るやつもいる。

モンスターも動いているから、足場にする場所を探すのも難しい。

だが、慣れたことだ。

俺はそのまま敵を足場にして敵の後方に抜け、走り去った。

そして、ついに20階に到達して、大きな扉が目に入ってきた。

俺は迷わずその扉を開け、中に入った。

俺を追っていたモンスターはかなりの数がいたが、どうやら扉の中には入ってこないようだ。

ここの主が恐いのか？

まあ、なんにしても助かったことだけは変わらない。

扉の中の部屋は、薄暗く、そしてとても広い空間だった。

奥に向かって伸びる、長方形の空間だ。

左右のは幅は約20メートル、奥は、暗くてわかりづらいが、10メートルくらいだろうか？

多分それくらいだろう。

そして、少ししたら、左右の壁にある松明がひとりでに燃え上がった。

そして、松明は次々と奥に向かって火がついて行く。

それにより、だんだんと部屋が明るくなっていき、部屋の中がよく見えるようになっていった。

ひび割れた石床や壁、その各所に飾られた大小様々な頭蓋骨、部屋

の奥には、玉座に座る巨大な何か。

「……でかくないか？」

明らかにサイズがおかしい気がするんだが？

俺はゆっくりと守護獣へ向かって歩きながら呟いた。

昔、前世で戦った守護獣は、もつと細身で、背も低かった。

もちろん、その赤い犬は俺が倒した赤い犬とは違うやつだとは思うのだが、それにしたって、部屋に入る前に追いかけて来ていた赤い犬とサイズが違いすぎる。

距離はもうそろそろ20メートルを切る。だが今だに守護獣が動く気配はない。

しかし、改めて近くでよく見てみると。

「……太ってるな、ぽっちゃり、いやデブか」

恐らく、沢山色々なものを食べて来たのだろう。

その瞬間、それまで微動だにしていなかった巨大な赤い犬が猛然と跳び、空中でぐるりと一回転して俺の近くに地響きとともに着地した。

そして、狼を思わせるアギトをいっばいに開いた。

「グルルラアアアッ!!」

やばい、ものすごい怒らせてしまった。

事実は、時として人を傷つける。

それはモンスターも例外ではなかったというわけか。

気にしていたんだな、自分が太っていることを。

デブというのは禁句だったか。